

鉄の音と、 家族の食卓



高橋正一

鉄の音と、家族の食卓

高橋正一

米寿のお祝いに

美和・誠・由紀と家族一同より

この本は、自分史サービスの見本として作った架空サンプルです。登場する人物、地名、会社、出来事はすべて架空で、実在の人物・団体・場所とは関係ありません。

目次

- 第一章 朝倉町の家と川
- 第二章 戦後の子ども時代
- 第三章 集団就職と旋盤
- 第四章 結婚と三人の子育て
- 第五章 工場の挑戦と失敗
- 第六章 喪失を抱えて続けた日々
- 第七章 退職後の菜園と孫

第一章 朝倉町の家と川

米寿の食卓

令和八年の一月、わたしは八十八になりました。

誕生日には、美和と誠と由紀が、それぞれの家から集まってくれました。四人で囲んだのは、いつもの食卓です。この食卓は、文子と二人で、家族の集まる場所にしてきたものです。わたしはそう思っています。

食事がすんで、ひと息ついたときでした。美和が、あらたまった顔で言いました。

「お父さんの話を、本にしよう」

誠が「孫たちにも読めるようにね」と言い、由紀が「お母さんの話も入れてね」と続けました。三人の話を聞きながら、わたしは文子の座っていた席に目をやりました。文子がいたら、きっと誰より先に「いいじゃないの」と言ったでしょう。

それでもわたしは、「わたしの話なんか、本にするほどのものはない」と答えました。ほんとうに、そう思ったのです。工場で旋盤を回して、家族を食べさせてきただけの人間です。

すると美和が、「それを決めるのは、読むほうよ」と言いました。

それ以上、言い返す言葉が見つかりませんでした。それで、引き受けることにしたのです。

さて、何から話せばよいのか。考えていると、耳の奥で鳴りだした音がありました。カン、カン、という、鉄を打つ音です。子どものころ、毎朝聞いていた父の音でした。

八十八年のうち、朝倉町で暮らしたのは十八年ほどです。それなのに、いちばん先に浮かんだのが朝倉町の音だったことが、自分でもふしぎでした。

八十八年分の話をするなら、やはりあの音から始めるのがよいのだろうと思います。

ただ、先にお断りしておきます。子どものころのことは、自分では覚えているつもりでも、あとで母や正二から聞いた話とまざっています。どこまでが自分の記憶なのか、わたしにも自信がありません。そのつもりで読んでください。

鍛冶場の隣の家

わたしは昭和十三年の一月、朝倉町の川沿いの家に生まれました。

台所の窓から、川が見える家でした。夜は川の音を聞きながら眠りました。そして家のすぐ隣に、父の鍛冶場がありました。

父は野鍛冶でした。農家の人が使う鍬や鎌を打ち、刃のこぼれたものを直すのが仕事です。

朝は、父がふいごで火をおこす音と、鉄を打つ音で目が覚めました。カン、カン、と高い音が続いて、ときどき低い音がまじります。子ども心に、音の調子で、その日の仕事がうまくいっているのかわかるような気がしていました。本当にわかっていたのかどうかは、いまとなっては確かめようがありません。

鍛冶場の土間には、金床と炭の山と、水を張った桶がありました。真っ赤に焼けた鉄を桶に入れると、ジュッと音がして、白い湯気が上がります。炭と鉄のにおいは、壁をこえて家の中までしてきました。

父は口数の少ない人でした。わたしが鍛冶場に入ろうとすると、「火のそばに来るな。見るなら、そこで見とれ」と言いました。それでわたしは、いつも入り口にしゃがんで、父の背中と火の色を見ていました。父の手は大きく、指には小さな火傷の跡がいくつもありません。

この本のために話をしていたとき、美和に「おじいちゃんは、どんな人だった」と聞かれました。わたしは「怖い人ではなかった。ただ、しゃべらん人だった」と答えました。いまでも、それ以上うまくは言えません。

冬の朝は、鍛冶場の入り口が、家じゅうでいちばん暖かい場所でした。火の熱が、入り口までとどくのです。わたしはそこにしゃがんで、手をこすりながら父の仕事を見ていました。

戦争が終わった翌年ごろに、父と鍛冶場の入り口に並んで撮った写真が残っています。入り口の様子は、戦争中と変わっていません。写真のわたしが立っているあたりが、ちょうど、いつもしゃがんでいた場所です。

見ているだけでは、つまらなくなっただけでしょう。あるとき、鍛冶場の外に落ちていた鉄くずを拾って、平たい石の上に置き、別の石で叩いてみました。父のまねです。そこを父に見られました。叱られると思って身を固くしましたが、父は「音が違う」と一言だけ言って、鍛冶場に戻って行きました。どこが違うのか、そのときのわたしに

は、まるでわかりませんでした。あの一言は、大人になって、自分が機械の音を聞くようになってから、ときどき思い出すことになりま
す。

農家の人が鎌を受け取りに来ると、父は持ち主の前で一度、その鎌を草に当てて見せました。すっと切れるのを確かめてから、渡すのです。何も言わずにそうするのが、父のやり方でした。わたしは子どもながら、それを見るのが好きでした。すっと切れると、持ち主の顔がゆるむのがわかるのです。

年の暮れになると、父は鍛冶場の土間をきれいに掃いて、金床の上に小さな鏡餅を供えました。その日だけは火を入れず、父は道具を一本ずつ布で拭いて、壁に掛けなおしていました。わたしは入り口から、その様子を見ていました。ふだんは鉄の音でいっぱいの鍛冶場が、その日はしんとしていて、別の場所のように見えたものです。三が日が明けて、また鉄を打つ音がすると、ああ、今年もはじまった、と思いました。

母は、朝早くから田畑に出て、家のことも一人で切り盛りしていました。夕方になると、母は台所から言いました。

「お父さんの音が止んだら、ご飯だよ」

鍛冶場の音が止むと、家族がちゃぶ台に集まります。ご飯には麦がまじっていました。父は黙って食べ、母がその日の田畑のことや、近所のことを話します。父は母の話を最後まで聞いて、ときどきうなずいていました。わたしにとって食卓というのは、鉄の音が止んだあとに始まるものでした。

この話を聞き取りのときにすると、美和が「うちの食卓の話は、そこから始まっていたのね」と言いました。言われてみれば、そうなのかもしれません。

母と家の前で撮った写真も、一枚あります。昭和十八年ごろ、わたしが五つころのものです。写真のわたしは、まぶしそうな顔をしています。撮った日のことも、誰が撮ってくれたのかも、覚えていません。

正二と川

昭和十七年、わたしが四つのときに、弟の正二が生まれました。

その朝のことは、妙によく覚えています。目が覚めても、鍛冶場から音がしませんでした。毎朝聞こえるはずの音がしないので、何か大変なことが起きたのかと思いました。家の奥で赤ん坊の泣き声がして、母のところへ行ってみると、正二が寝ていました。父はその日一日、鍛冶場に火を入れなかったのだと、あとで母から聞きました。わたしの覚えている静かな朝は、そういうわけだったのです。

母が田畑に出ているあいだ、わたしは正二をおぶって、川を見に行きました。正二は泣いていても、川の音を聞かせると、泣きやむことが多かったのです。四つや五つの子が赤ん坊をおぶうのですから、ずいぶん重かったはずです。けれども、重かったことより、背中が温かったことのほうを覚えています。

川は、わたしたちの暮らしのすぐそばにありました。母は川で野菜を洗いました。雨のあとで川が濁り、水かさが増すと、母はわたした

ちを川へ行かせませんでした。そういう日は、窓から聞こえる川の音が、いつもより大きく聞こえたものです。

夏になると、わたしは川の浅瀬に入って、小さな魚を追いました。手でつかめたことは、ほとんどありません。母には「深いところへは行くな」と何度も言われました。

正二と二人で川原にしゃがみ、魚をとっている写真もあります。ただ、これは戦争が終わって何年かたってからのものです。戦争中の正二はまだ小さくて、一緒に魚をとるところまではいきませんでした。それでもこの写真を見ると、おぶっていたころの背中の重さを思い出します。

正二が歩けるようになると、今度はわたしのあとをついて、鍛冶場の入り口まで来るようになりました。冬の朝は、二人で並んでしゃがんで温まりました。父には「二人とも、そこで見とれ」と言われました。わたしの場所だった入り口が、二人の場所になったのです。

母はときどき、父が火を落とす前に、炉の残り火の灰の中に芋を埋めておいてくれました。夕飯の前に掘り出すと、皮が黒くこげていて、割ると湯気が上がります。正二と二人で、熱い、熱いと言いながら分けて食べました。

鉄の音が戻った夏

昭和十九年から、わたしは町の国民学校に通いました。川沿いの道を歩いていくのです。帰りは川をのぞきながら歩くので、いつも遅くなりました。昭和二十年の夏は、二年生でした。

戦争のことを、わたしは七つまでの子どもの目でしか知りません。

戦争が長くなるにつれて、鍛冶場の音が前より少なくなりました。あとになって母から聞いたところでは、新しい鉄が手に入りにくくなって、父は古い道具を直す仕事ばかりになっていたそうです。けれども子どものわたしにわかったのは、音が少なくなった、ということだけでした。

終わりのころには、ちゃぶ台の上のご飯が少なくなったことも、なんとなく覚えています。母は自分の分を減らしていたのかもしれませんが。けれども、それを母に確かめたことは、とうとうありませんでした。

夜は、明かりに黒い布をかけました。遠くの空で飛行機の音がすると、母は正二を抱いて家の奥へ入りました。わたしは、何が起きているのか、よくわかっていませんでした。

戦争が終わった日は、暑い日でした。蝉が鳴いていたように思います。ただ、これもほかの夏の記憶とまざっているのかもしれませんが。

その日、大人たちは近所の家のラジオの前に集まっていました。何を言っているのか、わたしにはわかりませんでした。母は黙って帰ってきて、いつものように夕飯の支度をしました。父も、何も言いませんでした。

しばらくして、母が明かりにかけていた黒い布を外しました。その晩は、部屋が急に明るく見えたのを覚えています。

それから何日かして、朝、鍛冶場からまた鉄を打つ音がしました。カン、カン、という、あの音です。それを聞いて、わたしは、何かが終わったのだと思いました。

わたしは入り口まで行って、いつものようにしゃがみ、父の背中を見ました。父はいつもと同じように打っていて、何も言いませんでした。

それが終わった日の次の朝だったのか、何日もあとだったのか、もうはっきりとはしません。わからないことは、わからないと書いておくことにします。

わたしの耳に残っているのは、戦争の音より、父の鉄の音のほうです。

第二章 戦後の子ども時代

墨を塗った教科書

戦争が終わった年の秋、わたしは七つで、町の国民学校の二年生でした。

学校へ行くと、先生が教科書を開かせて、ここと、ここを塗りなさい、と言いました。筆に墨をふくませて、言われた行を黒く消していくのです。きのうまで声に出して読んでいた文が、一行ずつ、まっ黒になっていきました。

なぜ消すのか、先生はくわしく話しませんでした。わたしたちも、聞きませんでした。子どもながらに、聞いてはいけないような気がしたのです。墨のにおいが教室にこもって、窓を開けても、なかなか抜けませんでした。

しばらくして配られた新しい教科書は、薄い紙に刷ってあって、自分で切って綴じるものでした。墨を塗った本よりずっと軽く、ページをめくると破れてしまいそうで、そっとめくったものです。

食べるものは、いつも足りませんでした。弁当は、麦の多いごはん、たくあんが二切れ。芋だけの日もありました。

冬の教室には火の気がなく、みんなで手に息を吹きかけながら字を書きました。わたしは朝、鍛冶場の炉の前で手を温めてから家を出ま

した。それでも学校に着くころには、指先はもう冷たくなっていました。

母は、暗いうちから田畑に出ていました。夕方、母が戻ってくるまで、正二の面倒を見るのはわたしの役目です。

正二は、どこへ行くにもわたしの後をついてきました。学校から帰ると、家の前で待っています。わたしが走ると走り、止まると止まる。うるさいと思うこともありました。けれども、振り返って正二がいないと、それはそれで落ちつかないのです。

秋の稲刈りのころは、学校から帰ると、正二を連れて田んぼへ行きました。わたしは刈った稲を運び、正二は落ちた穂を拾います。母は手を止めずに、「よう拾った」と正二に言いました。正二はそれがうれしくて、日が暮れるまで、田んぼの中をかがんで歩いていました。

昭和二十三年の春には、六つになった正二が、同じ学校に上がりました。はじめのうちは、川沿いの道を、手を引いて一緒に通いました。正二は川をのぞきこんでは立ち止まるので、遅れないように、わたしが引っぱって歩くのです。手を離すと、また川のほうへ行ってしまう。学校に着くころには、わたしの手のひらは、いつも汗でぬれていました。

戦争が終わってしばらくすると、近所の田畑をやっている人たちが、刃の欠けた鍬や、柄の抜けた鎌を持って、また鍛冶場に来るようになりました。道具を抱えて、鍛冶場の前で順番を待っている人がある。それを見ると、わたしはなんとなく誇らしい気持ちになったものです。

ふいごの前で

昭和二十五年、十二の年から、わたしは父の鍛冶場で、ふいごを押す手伝いを本格的に始めました。

それまでも、炭を運んだり、掃除をしたりはしていました。けれども、火の番を任されたのは、このときがはじめてです。入り口から見ているだけだった場所に、ようやく入れてもらえたのです。

冬の朝は、父が夜明け前に炉に火をおこします。わたしも暗いうちに起きて、炭を足し、ふいごをゆっくり押して、火を育てました。火が落ちつくまでの、静かな時間があります。そのあいだ、父は黙って、その日に使う道具を並べていました。鍛冶場の一日は、その静けさから始まるのでした。

ふいごは、炉に風を送る道具です。父の鍛冶場のものは、木の箱に取っ手がついていて、それを押したり引いたりすると、炉の底から風が出ます。押すと、炭がごうっと鳴って明るくなる。手をゆるめると、ずっと暗くなる。

はじめは面白くて、力まかせに押しました。すると、父に止められました。

「火は色で見ろ」

父は、それだけ言いました。

父は鉄を炉に入れて、ちょうどよい色になったら取り出して打ちます。風が強すぎると鉄が焼けすぎ、弱いと色が上がらない。火の色は、暗い赤から赤へ、赤からだいたいへ、そして黄色に近い明るい色へと変わっていきます。父が鉄をつかみ出すのは、いつも同じ色のときでした。

わたしはその色を覚えようとして、炉の中をじっと見つめました。見つめすぎて、夜、目を閉じても赤いものが浮かんだのを覚えています。

鍛冶場の音も、忘れられません。父が金床の上で鉄を打つと、カン、カン、と高い音がします。打ちはじめは音がやわらかく、鉄が冷えてくると、だんだん硬い音に変わっていきます。父は、その音が変わる前に、鉄を炉に戻しました。

「鉄は、待ってはくれん」

父がよく言った言葉です。熱いうちに打たないと、鉄は言うことを聞きません。だから父の仕事には、迷っている時間はありませんでした。手は止まらず、口はほとんど開きません。

焼きを入れるときは、真っ赤な鉄を水に入れます。じゅっと鳴って、白い湯気が上がる。その湯気の向こうで、父は刃先を目の高さに持ち上げて、しばらく眺めていました。指先で刃をなでて、うなずく。それで一つ、仕上がりです。

父は、ほめない人でした。わたしのふいごがうまくいっても、何も言いません。まずいときだけ、短く「強い」とか「止めるな」と言いました。何も言われない日は、うまくいった日なのだと、わたしはズいぶんあとになって気がつきました。

十三のころだったと思います。父が一度だけ、残りの鉄で、火箸を打たせてくれました。

見よう見まねで槌をふるいましたが、打っているうちに鉄が冷えて、火箸は曲がってしまいました。父は何も言わずに、その鉄を炉に戻しました。そして、

「もう一回」

と言いました。二本目も、うまくいきませんでした。三本目で、ようやくまっすぐになりました。その三本目の火箸は、そのあと長く、家で使われていました。

正二は、わたしがふいごを任されたのが、うらやましくて仕方がなかったようです。

「兄ちゃん、ずるい」

そう言って、わたしの横から取っ手に手を伸ばしました。けれども正二はまだ八つで、背が足りません。両手でぶら下がるようにしても、ふいごはびくともしませんでした。父は正二には炭運びをさせました。正二は口をとがらせながら、顔を真っ黒にして、炭のかごを運んでいました。

夏の鍛冶場は、たまらなく暑いところでした。炉の前に立っていると、汗が目に入ります。冬は反対に、家じゅうで鍛冶場がいちばん暖かい場所でした。

学校から帰ってきた夕方、炉の火で手をあぶりながら、父の打つ音を聞いている。わたしにとっては、あの時間がいちばん落ちつくときだったように思います。

直した鍬を受け取りに来た農家の人が、お礼にと、米や野菜を置いていくことがありました。父は、代金のほかは受け取らないと言うのですが、母がいつのまにか台所にしまっていました。そういう晩は、ちゃぶ台のおかずが一品増えました。

片道一時間の道

昭和二十八年の春、わたしは十五で、町の高校に入りました。

家から高校までは、歩いて片道一時間かかりました。川沿いの道をくだって、橋を渡り、田んぼのあいだを抜けていきます。そのころ、自転車のある家は少なく、うちにもありませんでした。朝は六時すぎに家を出て、帰りは日が暮れかかるところです。雨の日は、番傘をさしても、膝から下がぬれました。

入学の日に、家の前で撮った写真が一枚残っています。学生服を着て立っているわたしです。学生服は少し大きくて、袖を折り返して着ていました。三年のあいだに背が伸びるだろうからと、母が大きめのものを用意してくれたのです。

写真のわたしは、まじめな顔をして、まっすぐ前を向いています。うれしかったのか、緊張していたのか、自分ではもう思い出せません。

そのころは、中学を出ると、働きに出たり、家の仕事を手伝ったりする子が多い時代でした。父も、はじめは「鍛冶屋に学問はいらん」と言っていたそうです。母が父に何度か話をしてくれて、わたしは高校へ行けることになりました。母がどう話したのかは、とうとう覚えてもらえませんでした。

片道一時間の道のりを、母は「歩けば着く」とだけ言って送り出しました。

たしかに、歩けば着きました。冬の朝、霜の降りた道を歩いていると、遠くの山の上が少しずつ明るくなってきます。行きは教科書の中身を頭の中で繰り返し、帰りはたいてい、何も考えずに歩きました。

家が近づくと、鍛冶場の音が聞こえてきます。その音が聞こえると、ああ、帰ってきた、と思いました。

冬の帰り道は、途中で日が暮れてしまいます。そういう日は、橋のたもとで正二が待っていることがありました。母に言われて、提灯を持って迎えに来たのです。正二は何も言わずに提灯をわたしに渡して、自分は先に立って歩きました。家に着くと、母が「寒かったろう」と言って、鍛冶場の炉の前に座らせてくれました。

高校には、まわりの村から通ってくる農家の子が多くいました。わたしは鍛冶屋の子で、服には炭のにおいがしみていました。「鍛冶屋の」と呼ばれることもありましたが、いやではありませんでした。父の打った鋤を使っている家の子も、なかにはいたのだと思います。

高校の授業でいちばん面白かったのは、てこや滑車の話でした。先生の話聞きながら、わたしはふいごの取っ手のことを考えていました。あの取っ手のどこを押せば、いちばん軽く風が送れるのか。

高校に通っているあいだも、休みの日と、帰ってからの少しの時間は、ふいごを押しました。わたしが学校に行っているあいだは、正二が押すことが増えました。正二も背が伸びて、もう取っ手にぶら下がらなくても押せるようになっていたのです。帰ってくると、父の横で、正二が汗をかいてふいごを押している。少しくやしいような、それでいて、ほっとしたような気持ちでした。

けれども、そのころから、鍛冶場の様子が少しずつ変わっていききました。

町の金物屋に、工場で作った鋤や鎌が並ぶようになったのです。形がそろっていて、値段も手ごろでした。新しい道具を作ってほしいと

頼みに来る人は、目に見えて減りました。持ちこまれるのは、直しの仕事ばかりになっていきます。鍛冶場の前に人が並ぶことも、なくなっていました。

父は、そのことについて、多くは語りませんでした。一度だけ、夕飯のときに、

「直す仕事があるうちは、まだええ」

と言ったのを覚えています。それが父の本心だったのか、母やわたしたちに向けた言葉だったのか、わたしにはわかりません。ただ、炉の前で父が座っている時間が長くなったことには、わたしも気づいていました。

やがて、炉に火を入れない日も出てきました。そういう日は、鍛冶場がしんとしています。学校から帰ってきても、あの音が聞こえません。道の途中で、今日は音がしない、と気づくと、なんだか足が重くなりました。

夜行列車の駅で

町を出て働こうと決めたのは、昭和三十年、高校三年の夏ごろでした。

学校に、町の外の工場からの求人の話が来ていました。集団就職の列車に乗って、何人かがまとめて出ていくのです。その話を聞いて、わたしは考えました。

父の腕が落ちたわけではありません。それでも、鍬を打ってほしいという人は、もう前ほどは来ない。この鍛冶場を、兄弟二人で継ぐことはできない。わたしはそう思いました。

それに、正直に言えば、機械というものを見てみたい気持ちもありました。金物屋に並んだ鋏は、どんな機械で、どうやって作られるのか。父が一本ずつ打つものを、どうやって何十本もそろえて作るのか。それを知りたかったのです。

父に話す前に、まず母に話しました。母は少し黙ってから、「お父さんには、自分で言いなさい」

と言いました。それで何日か、言い出せずに過ごしました。

父に話したのは、夕飯のあとでした。父はしばらく黙って、湯のみのお茶を飲んでいました。それから、

「決めたんなら、行け」

と言いました。それだけでした。

止められると思っていたわたしは、拍子ぬけしたような、さびしいような気持ちになりました。あとで母から聞いたところでは、父はその晩、遅くまで鍛冶場に一人でいたそうです。何をしていたのかは、わかりません。

その少しあとで、父は正二に、

「ふいごは、これから正二が押せ」

と言いました。正二はもう十三で、背もずいぶん伸びていました。

母は、反対も賛成もしませんでした。ただ、出発の日が近づくと、着るものを繕ったり、持たせる物をそろえたりと、いつものように手を動かしていました。

出発の前の晩は、なかなか眠れませんでした。隣では正二が寝息を立てています。母は遅くまで、明かりの下で繕いものをしていました。川の音が、いつもより大きく聞こえた晩でした。

昭和三十一年の春、高校を出てすぐ、わたしは十八で町を出ました。

出発の日の朝も、わたしはいつものように、鍛冶場でふいごを押しました。父は何も言わず、いつもと同じように鉄を打ちました。カン、カン、という音も、いつもと同じでした。昼前になって、父が「もうええ」と言い、わたしは取っ手を正二に渡しました。それが、わたしの鍛冶場での最後の仕事になりました。

乗るのは、夕方に朝倉町の駅を出る、集団就職の夜行列車でした。見送りに来たのは、母と正二です。父は、駅には来ませんでした。家を出るとき、鍛冶場の入り口で「行ってこい」と言われたのが、父との別れでした。父はそのまま炉のほうへ戻っていき、わたしが道を曲がるまで、鉄を打つ音が聞こえていました。

駅のホームで、三人で写真を撮りました。誰がシャッターを押してくれたのか、覚えていません。写真のわたしは、入学の日と同じように、まじめな顔をしています。母はよそ行きの着物で、正二はわたしより少し後ろに立っています。

列車が来るまで、母は何度も、わたしの持ち物を確かめていました。風呂敷の結び目をほどいては、また結びなおすのです。そして、「向こうでも、ちゃんと食べなさい」

と言いました。母がくれたにぎりめしの包みは、思っていたより重たいものでした。

正二は、しばらく何も言いませんでした。列車に乗りこむ前になって、

「ふいごは、おれが押す」

とだけ言いました。父に言われたことを、自分の口で言いなおしたのだと思います。わたしは「頼む」と答えたように思いますが、はっきりとは覚えていません。

列車が動きだすと、ホームの母と正二は、あっという間に小さくなりました。窓の外は、すぐに暗くなっていきました。川沿いの家の明かりがどれなのか、探しているうちに、町は見えなくなりました。

あのとき町を出たことが、よかったのかどうか。いまでも、ときどき考えます。わたしが出ていったあとも、正二は町に残り、父と母のそばにいてくれました。そのことを思うと、答えは一つに決められません。

列車の床から伝わってくる音は、鍛冶場の音とはまるで違っていました。規則正しく、止まることのない音でした。その音を聞きながら、わたしは膝の上のにぎりめしの包みを、ずっと抱えていました。

第三章 集団就職と旋盤

音が違う

昭和三十一年の春、わたしは夜行列車で青海市に出てきました。十八でした。小さな工場で、最初の一年は、削っては捨てる毎日です。

先輩は多くを語らない人で、わたしの削った部品を指でなぞっては「まだ、音が違う」とだけ言いました。夜、誰もいなくなった工場で旋盤を回し、耳を澄ませたものです。

いまでも目を閉じると、あの晩の工場の音が聞こえてくるような気がします。けれど、そこへたどりつくまでのことから、順に話してこうと思います。

荷物は柳行李がひとつと、母が持たせてくれたにぎりめしの包みだけでした。

汽車が動きだすと、もう引き返せません。同じ車両には、近くの町から同じように出ていく若い者が何人も乗っていました。誰もあまりしゃべらず、窓の外を見ていました。外はすぐに真っ暗になり、見えるのは窓に映る自分の顔ばかりです。わたしはほとんど眠れませんでした。にぎりめしは、夜中にひとつだけ食べました。残りはもったいなくて、朝まで取っておきました。夜が白みかけたころ、向かいの席の若い者と、ようやく少しだけ話しました。行き先を聞くと、わたしとは別の町の工場でした。名前も聞かないまま、それきりになりました。

た。明け方に食べた残りのにぎりめしは、冷たく固くなっていましたが、家の塩の味がしました。

夜が明けて、青海省の駅に着きました。ホームに降りて最初に目に入ったのは、何本も並んだ煙突です。朝倉町では、どちらを向いても山が見えました。ここでは山のかわりに煙突が立っている、と思ったのを覚えています。

東浜精機の工場は、思っていたより小さなものでした。門をくぐると、油と鉄くずのにおいがしました。父の鍛冶場とは違うにおいです。それでいて、どこか似ているとも思いました。どちらも、鉄を相手にする場所のにおいだったのでしょう。

工場の中は、思っていたよりずっとやかましいところでした。機械が何台も回っていて、すぐ隣にいる人の声も、大きな声を出さないと聞こえません。同じ汽車で来た者のうち何人かは、わたしと同じ工場に入りました。みな、その音の中で、どこに立っていればいいのかわからない顔をしていました。

わたしは旋盤の見習いになりました。旋盤というのは、鉄の棒を回しながら、刃物を当てて削っていく機械です。教えてくれることになったのが、先輩の岩田さんでした。

見習いといっても、はじめのひと月ほどは、旋盤にさわらせてもらえませんでした。朝は誰よりも早く工場に入り、床に落ちた削りくずを掃き集めます。削りくずは細い針金のように、うっかり素手でつかむと指が切れます。それを箱に集め、材料の鉄の棒を運び、機械に油をさす。そのあいだに、先輩たちの手もとを横目で見ていました。

岩田さんは、わたしより十いくつか年上に見えました。背は高くありませんでしたが、手が大きく、指の節が太い人でした。仕事が終わると、自分の旋盤をウエスでいいいに拭いてから帰ります。刃物も、使い終わるとかならず研ぎなおしていました。

岩田さんは、手本を一度だけ見せてくれました。棒を取りつけ、機械を回し、刃物を送る。手つきに迷いがなく、削りくずが細く長く、途切れずに出てきます。それから「やってみろ」と言って、わたしに場所をゆずりました。説明らしい説明は、それきりでした。

岩田さんの旋盤からは、いつも同じ音がしていました。高くもなく、低すぎもせず、途切れない音です。工場の中でほかの機械がどれだけやかましくても、わたしには岩田さんの音だけは聞き分けられるような気がしました。ただ、そのころはまだ、それがなぜなのかわかっていませんでした。

旋盤の前に立つようになってすぐのころ、わたしが自分の旋盤を拭かずに帰ろうとしたことがあります。岩田さんに一度だけ呼びとめられました。岩田さんは何も言わずに、ウエスをわたしに渡しました。それからは、わたしも拭いてから帰るようになりました。

最初の一年は、本当に削っては捨てる毎日でした。寸法が合わない。表面が荒れる。刃物の当て方が悪くて、削りくずがちぎれて飛んでくる。できそこないの部品は、くず鉄の箱へ入れます。その箱がいっぱいになっていくのを見るのが、つらかったものです。鉄は、捨てられても文句を言いません。だからよけいに、申しわけない気がしました。

削りくずで、手をやけどしたこともあります。削ったばかりのくずは熱く、作業着の袖口から入りこむと、思わず声が出ました。岩田さんは「袖口のボタンは留めとけ」とだけ言いました。

朝倉町へ帰ろうかと思ったことも、一度や二度ではありません。給料をもらい、寮の飯を食べて、それでいて毎日、鉄を捨てている。自分はここにいていいのだろうかと思いました。母からは、ときどき葉書が届きました。体に気をつけて、というようなことしか書いてありません。それを読むと、もう少しやってみようと思うのでした。

岩田さんは、わたしの削った部品を手にとると、目で見るとより先に、指でなぞりました。そして、寸法が合っているときでも、あの言葉を使うのです。はじめは、何のことかわかりませんでした。部品は、もう削り終わって手の中にあります。音など、どこにもありません。

けれど、わからないと言うのがくやしくて、聞き返せませんでした。それで、夜に残って旋盤を回すことにしたのです。岩田さんに頼むと、「片づけて帰れよ」とだけ言って、残ることを許してくれました。

夜に削るのは、昼のあいだに出た端材です。製品にならない鉄の切れ端を、岩田さんが箱にまとめて、わたしの旋盤の横に置いておいてくれました。何も言わずに置いてあるので、はじめは誰が置いたのかもわかりませんでした。

誰もいなくなった工場は、昼とはまるで別の場所でした。自分の旋盤の音しかしません。刃物が鉄に食いつく音、削りくずが流れる音、

モーターのうなり。昼間はほかの機械の音にまぎれて、一度も聞き分けたことのない音でした。

何晩も続けるうちに、少しずつわかってきました。刃物の当たり方がよくないときは、音が高く、きしむような音になります。うまくいっているときは、低く、ひと続きの音が鳴ります。そして、その音で削ったものは、指でなぞったときの手ざわりが違うのです。岩田さんが指で確かめていたのは、たぶん、その音の跡だったのだと思います。

耳だけではありません。刃物を送るハンドルにも、手ごたえが伝わってきます。いい音のときは、ハンドルが手にすなおについてきます。悪い音のときは、どこか引っかかるような重さがあります。音と手ごたえは、同じことを別々に教えてくれていたのです。

二年目の冬のある晩、自分の削る音が、岩田さんの音に少し近づいた気がしました。そのとき、ふと、子どものころに押した鍛冶場のふいごと、父の槌の音を思い出しました。父も、鉄の音を聞いていた人です。わたしは鍛冶場を継がずに町を出ました。それなのに、遠い町の工場で、父と同じように鉄の音を聞いている。妙なものだと思いました。

次の日、削った部品を岩田さんに見せました。岩田さんは指でなぞって、そのときは何も言いませんでした。「音が違う」と言われなかったのは、それがはじめてでした。

それで一人前になったわけではありません。三年目になって、ようやく荒削りを任されるようになりました。岩田さんが仕上げる前の、おおまかな形まで削る仕事です。仕上げは、まだ岩田さんの手でし

た。わたしの削ったものに岩田さんが最後の刃を入れるのを、毎日、横で見っていました。

寮の机

寮は、工場のすぐ近くにありました。独身の者ばかりが住む寮で、部屋は相部屋です。窓からは工場の屋根が見えました。夜になると、その屋根の向こうで、まだどこかの機械が回っている音がしていました。

朝倉町の家では、夜になると川の音がしていました。寮では、それが聞こえません。そのかわりに機械の音がします。川の音のしない夜には、なかなか慣れませんでした。

日曜日には、たまった作業着を洗いました。油のしみた作業着は、石けんで何度こすっても、においまでは落ちません。洗い終わると、街を少し歩きました。店先には、朝倉町では見たことのないものがたくさん並んでいました。けれど、買うことはあまりありませんでした。見て歩くだけで、一日が過ぎていきました。

寮の食堂の飯は、量だけはたっぷりありました。朝倉町の家と飯とは味が違いましたが、腹をすかせて帰ってくると、何でもうまく感じました。母の葉書には、ときどき返事を書きました。工場のことは、うまく書けませんでした。旋盤の音のことなど、どう書けば伝わるのかわかりません。結局、元気でやっています、とだけ書いて出しました。

工場で撮ってもらった写真が一枚あります。十九のころ、旋盤の前に作業着で立っているものです。まだ顔つきが子どもで、作業着のほ

うが体より大きく見えます。肩に力が入っているのが、写真からでもわかります。あのころのわたしは、毎日、肩に力を入れて旋盤の前に立っていたのでしょう。

寮の部屋で撮った写真も残っています。二十二のころのものです。小さな机の前に座っていて、机の上には手帳が一冊のっています。表紙が油で黒ずんだ、小さな手帳です。

その手帳には、その日に削った部品の寸法と、うまくいかなかったわけを書きつけていました。音のことも書きました。「高い音。刃物の出しすぎ」というふうにです。字は下手でしたが、自分にだけ読めればいいと思っていました。

夜の工場から寮へ戻ると、まずその手帳を開きました。同じ部屋の者が寝息を立てているそばで、小さな明かりをつけて書くのです。書いているうちに、その日の音が耳の中でもう一度鳴るような気がしました。うまくいかなかった日のほうが、書くことは多くなりました。岩田さんが口にすることは少なかったので、手帳に並んでいるのは、ほとんどがわたし自身のしくじりです。

夜の工場から寮へ戻るときは、門のわきの守衛所の前を通ります。守衛のおじさんは、わたしの顔を見ると「また残りか」と言って、小窓から手をあげてくれました。名前も知らないままでしたが、あの小窓の明かりを見ると、今日も一日が終わった、と思ったものです。

写真の中の二十二のわたしは、十九のときよりも、少しだけ肩の力が抜けているように見えます。手帳が何冊目になっていたのかは、もう覚えていません。けれど、あの机の上で、わたしは一日の仕事をもう一度削りなおしていたのだと思います。

一人で任された部品

昭和三十七年、二十四のときに、はじめて一人で精密部品を任されました。

ある朝、岩田さんが図面を一枚わたしてきて、「おまえがやれ」と言いました。それまでは、岩田さんが見ている横で削るか、岩田さんが仕上げる前の荒削りをするのが、わたしの仕事でした。今度は、最初から最後まで、わたしひとりです。

図面の寸法は、それまで削ってきたどの部品よりも細かいものでした。許される狂いは、髪の毛の太さよりずっと小さいのです。わたしはマイクロメーターで何度も測りました。測って、少し削って、また測る。削りすぎたら、もう戻せません。鉄は、あとから足すことができないのです。だから、あと少しというところで手を止めて、測る。その繰り返しでした。最初の何日かは、一日に削れるのはほんの数個でした。

鉄は、温まると少しふくらみます。削ったばかりの部品は熱をもっているのです、すぐに測ると数字が狂います。冷めるのを待ってから測る。そういうことも、そのころに体で覚えました。

寸法を追いこんでいくときに役に立ったのが、夜の工場で覚えた音でした。数字を見る前に、音で、いまどのあたりまで来ているかがわかるのです。高い音がしかけたら、刃物を見なおす。低い音がひと続きに鳴っているうちは、そのまま進める。手帳に書きためてきたことが、ようやく手の中でひとつにつながったような気がしました。

最初の一個を削った日は、昼の弁当がのどを通りませんでした。できあがったとき、手のひらが汗でぬれていました。指先ほどの大きさの部品で、光にかざすと、細かい削り目がそろって並んでいました。岩田さんのところへ持っていくと、岩田さんはいつものように指でなぞり、それから自分でも測りました。そして何も言わずに、その部品を出荷の箱に入れました。

何も言われなかったのが、わたしにはいちばんの合格でした。

その月、母に葉書を書きました。工場のことはやはりうまく書けず、「一人で仕事を任されました」とだけ書きました。しばらくして届いた母の返事には、「お父さんに読んで聞かせました」とありました。父が何と言ったのかは、書いてありませんでした。

岩田さんはそのあとも、ときどきわたしの部品を手にとって、指でなぞっていました。何も言わずに置くこともあれば、黙って首をかしげることもありました。首をかしげられた日は、その晩、また残りました。

その部品が、どこの、何という機械に入るのかまでは、わたしたちには知らされませんでした。箱に詰められた部品は、トラックで遠くへ運ばれていきます。わたしはそれを見送りました。

自分の手で確かめた部品が、どこか遠くの機械の中で動いている。そう思うと、不思議な気持ちになりました。誰にも見えないところで、黙って回っている。それでいいのだと思いました。人に見てもらえなくても、確かめたものは確かめたものです。

そのころから、部品を箱に入れる前に、最後にもう一度、指でなぞる癖がつきました。測って数字が合っていても、なぞらずには箱に入

られないのです。岩田さんの癖が、いつのまにかわたしにうつっていました。

このころには、刃物を自分で研ぐことも覚えました。刃物の角度が少し違うだけで、音が変わります。砥石に刃を当てると、火花が散ります。その火花を見ていると、父の鍛冶場のことがまた頭に浮かびました。

それからは、任される部品が少しずつ増えていきました。うまくいく日ばかりではありません。寸法が合わずに、一日の仕事をやり直したこともあります。そういう日は、夜にまた残りました。誰もいない工場で旋盤を回し、どこで音が変わったのかを探しました。見習いのころと、することは何も変わっていなかったのです。

いちばんむずかしかったのは、しくじりのわけが自分の手にあると認めることでした。機械の調子のせいにしたくなる日もあります。材料のせいにしたくなる日もあります。けれど、夜の工場ですら一人で音を聞いていると、たいていは自分の刃物の当て方か、測り方のどこかに行きつきました。それを手帳に書くのは、気持ちのいいことではありませんでした。

耳に鉛筆

昭和四十三年、三十のときに班長になりました。

班長になれと言われたとき、すぐには返事ができませんでした。わたしはまだ、削る側にいたかったのです。旋盤の前に立って、自分の手で鉄を削っていれば、それでよかった。人の上に立つことなど、考

えたことはありませんでした。それでも結局、引き受けました。断るだけのわけを、うまく言葉にできなかったからです。

班長になってからは、自分で旋盤を回す時間がぐっと減りました。図面を見て、段取りを決めて、みんなの手もとを見て回る。それが、思っていたよりさびしいものでした。ほかの人の旋盤の音を聞きながら、自分の手が何もしていないのが落ちつかなかったのです。

そのころから、耳に鉛筆をはさむようになりました。図面に寸法を書きこんだり、若い人に削り方を描いて見せたりするのに、いつでも書けるようにしておきたかったのです。その年に工場で撮ってもらった写真にも、耳の鉛筆がちゃんと写っています。

鉛筆は短くなるまで使い、小刀で削りました。刃物を研ぐのと同じで、鉛筆の削り方にも、その人の手が出ます。若い人の鉛筆を見ると、どういう削り方をする人なのか、少しわかるような気がしました。

班には、わたしを入れて六人ほどがいました。朝はまず、その日に削る部品と、誰がどの旋盤につくかを決めて、図面を配ります。それから、みんなの袖口のボタンが留まっているかを見て回りました。岩田さんに言われたことを、今度はわたしが言う番になったのです。

班長の仕事は、自分で削るのとはまるで違いました。自分の手なら、思ったとおりに動かせます。人の手は、そうはいきません。わたしは口で説明するのが下手でした。岩田さんのように黙って見ていればいいのか、それとも言葉で教えなければいけないのか。はじめのうちは、ずいぶん迷いました。

黙っていると、若い人はどうしていいかわからずに立ちつくします。かといって、ひとつひとつ口で言ってしまうと、自分で気づくところなくなってしまう。わたしが夜の工場に残ったのは、わからないのがくやしかったからです。けれど、誰もがそういうふうに残れるわけではありません。

ある日、若い人がひとり、削り終えた部品を持ってきました。図面の数字どおりに測ったけれど、これでいいのか自信が持てない、と言うのです。数字は合っているのに、自信がない。その気持ちは、わたしにもよくわかりました。その人の顔を見ていると、くず鉄の箱の前に立っていた十八のわたしが、そこにいるような気がしたのです。

わたしは、その人の旋盤の前に一緒に立ちました。そして言いました。

「手を動かして、確かめるんだ」

それから、わたしがひとつ削って見せて、音を聞かせました。次にその人に削らせて、同じように音を聞かせました。削り終えたものを、ふたりで指でなぞりました。その人はしばらく黙っていましたが、やがて、自分が最初に持ってきた部品を、もう一度なぞりなおしていました。数字は、測れば出てきます。けれど、その数字を信じていいかどうかは、自分の手と耳で確かめるしかないのです。

あとになって考えると、あれは岩田さんの「まだ、音が違う」を、わたしなりの言葉に直したものだのだと思います。岩田さんは言葉を少なくして、わたしに確かめさせました。わたしは言葉を足して、同じことを伝えようとしたのでしょう。どちらがよかったのかは、いまでもわかりません。

しばらくして、その人が、夜に残って旋盤を回したいと言ってきました。わたしは「片づけて帰れよ」とだけ言いました。言ってから、どこかで聞いた言葉だと気がついて、ひとりで少し笑いました。

うまくいかなかった日もあります。言葉を足そうとして、かえって言いすぎてしまったこともありました。そういう日は、その晩、わたしのほうが眠れませんでした。岩田さんが黙っていたのは、もしかすると、言いすぎないためだったのかもしれませんが。そう思うようになったのは、だいぶあとのことです。

あのころのわたしは、若い人に教えているつもりで、本当は自分に言い聞かせていたのかもしれませんが。班長になっても、わからないことはいくらでもありました。そのたびに、手を動かして、確かめる。それしか、やり方を知らなかったのです。

この言葉は、そのあともずっと、わたしのそばにありました。この本を作ることになって、家族に何を残したいかと聞かれたとき、最初に浮かんだのも、この言葉です。

いまでも、ものを手に取ると、まず指でなぞってしまいます。茶わんでも、戸の取っ手でもそうです。指でなぞる癖は、とうとう抜けないままでした。

十八の春に夜行列車で町を出たとき、わたしの手には柳行李ひとつと、母のにぎりめしの包みしかありませんでした。それから十二年がたって、手と耳に覚えさせたものが、少しはできていました。今度はそれを、若い人に渡していく番でした。

第四章 結婚と三人の子育て

伝票の数字

班長になって二年目の、昭和四十四年のことです。わたしは三十一になっていました。

班長になると、週に一度、班の作業日報と材料の伝票をまとめて、事務所へ持っていくのが仕事のひとつになりました。工場から事務所までは、同じ敷地のなかを歩いて数分です。それでも、油のにおいのする作業着のまま事務所の戸を開けるのは、どうしても落ち着きませんでした。事務所の床は、工場とちがって、切りくずひとつ落ちていません。机が並び、そろばんの音がしています。わたしは入り口のところで、帽子を取ったものかどうか、毎回迷っていました。

窓口で伝票を受け取っていたのが、中村文子でした。

文子は、伝票を受け取ると、その場で数字を一つずつ指でたどって確かめました。急いでいる様子はないのに、手は止まりません。ある日、その指が一か所で止まりました。

「高橋さん、ここ、一本足りません」

わたしは、そんなはずはないと思いました。けれど、工場に戻って数え直してみると、文子の言ったとおりでした。わたしの書きまちがいです。部品の寸法なら百分の一ミリまで気にするのに、自分の書いた数字は見直していなかったのです。次の週、伝票を出すときに「先

週はすみませんでした」と言うと、文子は「合っていればいいんです」とだけ言いました。

文子の書く数字は、まっすぐで、読みやすい字でした。七と一がまぎれることはありません。図面の数字みたいだ、とわたしは思いました。工場では、読みちがえられる数字を書く人がいちばん困ります。

気がつくと、わたしは伝票を持っていく日を楽しみにしていました。自分でそれに気づいたときは、少しあわてました。

帰りの時間がたまたま重なった日がありました。工場の門を出たところで一緒になり、駅まで並んで歩きました。それが始まりです。文子は青海市の生まれで、町のことをよく知っていました。どの店が古いか、どの道が近いか。わたしはもう十年以上青海市に住んでいたのに、工場と寮のあいだしか知らなかったのです。

それからは、帰りが重なる日を、どちらからともなく待つようになりました。駅までは歩いて二十分ほどです。文子は歩きながら、よく工場のことを聞きました。旋盤というのは何をする機械なのか。削った部品は、どこへ行くのか。わたしは、削った部品はほかの工場で組み立てられて、遠くの機械のなかで動くのだと話しました。自分がどの何の機械のなかに入るのかは、わたしたちにもわかりません。そう言うと、文子は「見えないところで動いているのね」と言いました。わたしは、そんなふう考えたことはありませんでした。

一度、どうしてあんなにていねいに伝票を確かめるのか、と聞いたことがあります。文子は少し考えてから、「数字は、まちがえたまま先へ行くと、あとで直すのが大変ですから」と言いました。旋盤でも同じです。最初の一本の寸法がずれていたら、そのあとの百本が全部ず

れます。だから最初の一本を、いちばんていねいに測るのです。事務所と工場で、同じことを考えている人がいる。それが、わたしにはうれしかったのだと思います。

わたしのほうは、話せることがあまりありませんでした。山の町のこと、家の前を流れる川のこと、父の鍛冶場のこと。そのくらいです。ところが文子は、鍛冶場の話をおもしろがって聞いてくれました。

「鉄を打つ音って、どんな音ですか」

そう聞かれて、わたしはうまく答えられませんでした。毎朝その音で目をさましていたのに、言葉にしたことがなかったのです。カン、でもない。キン、でもない。口で言おうとすると、どれもちがう気がしました。わたしが黙ってしまうと、文子は「いつか聞いてみたいです」と言いました。

結婚を申し込んだのは、その年の暮れ近くだったと思います。何と言ったのかは、覚えていません。たぶん、ろくなことは言っていないのでしょう。文子はあとになって、「あのころのあなたは、工場の話しかしない人だった」と言って笑っていました。そのとおりだったと思います。

朝倉町の両親には、手紙で知らせました。返事は母の字で来ました。父は字を書くのが得意ではありませんでしたから、たいていそうなのです。母の手紙のおしまい、父の言葉が一行だけ書いてありました。

「からだを大事に、ふたりでやれ」

父らしい、短い言葉でした。

昭和四十五年、わたしたちは結婚しました。わたしは三十二、文子は二十八です。式は小さなものでした。背広は、その日のために一着だけ買いました。父と母も、朝倉町から出てきてくれました。父が青海市に来たのは、それが初めてです。父は式のあいだ、ほとんど何も話しませんでした。ただ、文子にはていねいに頭を下げていました。式が終わって朝倉町へ帰るとき、父は駅のホームで、わたしに「しっかりやれ」とだけ言いました。

その日の写真が一枚残っています。ふたりで並んで立っている写真です。文子は落ち着いた顔をしています。わたしは顔がこわばっています。旋盤の前に立つほうが、よほど楽でした。

結婚して最初の朝、文子は弁当を作ってくれました。寮にいたころは、昼は工場の食堂ですませていましたから、自分の弁当を持って工場に行くのは、青海市に来て初めてのことです。昼に弁当箱のふたを開けると、班の若い者たちがのぞきこみに来ました。わたしは何も言わずに食べました。からになった弁当箱を持って帰ると、文子はそれを洗いながら、「きょうは何がおいしかったですか」と聞きました。わたしは「全部」と答えました。文子は、それでは次に何を入れればいいのかわからない、と言いました。それから、わたしは、何がおいしかったかを一つだけ言うようにしました。

社宅のちゃぶ台

所帯を持って、青海市の社宅に移りました。二間と、小さな台所のある部屋です。壁は薄く、隣の部屋のせきばらいまで聞こえました。

隣も向かいも、工場の人の家族です。工場までは歩いて十五分ほどでした。

社宅に住んでいると、仕事と家の境目があまりありません。朝、家を出ると、同じ班の者と一緒になります。夜、風呂屋の帰りにも、また顔を合わせます。そのうち、わたしが手先の仕事をすると思われ、社宅の人から、取っ手のとれたやかんや、つまみの折れたラジオを持ちこまれるようになりました。わたしは夕飯のあと、ちゃぶ台の上に新聞紙を広げて、それを直しました。文子は、それを横で見ているのが好きだと言っていました。直ったものを返しにいくと、たいてい、お礼に野菜や干物をもらって帰ってきました。

文子は、美和が生まれる前の年まで、事務所の仕事を続けました。朝は同じ時間に家を出て、工場の門のところで別れます。文子は事務所へ、わたしは工場へ。夕方、また門のところで待ち合わせる日もありました。文子が事務所をやめる日、わたしは伝票を持っていく係を、班の若い者にゆずりました。窓口に別の人が座っているのを見るのが、なんとなくいやだったのです。

社宅で最初買った家具は、丸いちゃぶ台でした。ふたりで使うには少し大きめのものです。文子が「ご飯は、そろって食べましょう」と言いました。わたしも、そうしたいと思いました。

朝倉町の家でも、鍛冶場の音が止むと、家族がちゃぶ台に集まりました。父は黙って食べ、母の話を最後まで聞いて、ときどきうなずいていました。自分が家を持つなら、食卓は家の者が顔をそろえる場所にしたい。はっきりそう考えていたわけではないのですが、文子にそう言われて、ああ、自分もそう思っていたのだ、と気がつきました。

班長の仕事は、いつも定時で終わるわけではありません。それでも、夕飯の時間にはできるだけ帰るようにしました。どうしても遅くなる日は、文子は先に食べずに待っていました。冷めたみそ汁をあたたため直してもらって、ふたりで向かい合って食べる。社宅のちゃぶ台の思い出は、そういう夜のことが多いのです。

昭和四十七年に、長女の美和が生まれました。わたしは三十四でした。

初めて美和を抱いたときのことは、よく覚えています。抱く前に、わたしは自分の手のひらが気になりました。旋盤の仕事を十五年あまり続けた手です。指の腹や手のひらの割れ目に、機械の油が染みこんでいます。わたしは何度も石けんで手を洗いました。洗っても、割れ目の黒いところは落ちません。

台所でいつまでも手を洗っているわたしを見て、文子が言いました。

「その手でいいんです」

それで、ようやく美和を抱きました。軽いのに、腕がふるえました。旋盤で削った部品なら、重さの見当がつきます。美和の重さには、見当のつけようがありませんでした。

美和が生まれた年の写真も残っています。社宅の部屋で、文子が美和を抱き、わたしが横に座っている写真です。

美和はよく夜泣きをしました。わたしの班には夜勤がありませんでしたが、朝が早いのです。夜中に美和が泣くと、文子が起きて、抱いて、部屋のなかを歩きました。わたしは布団のなかで、それを聞いていることが多かったと思います。わたしがしたことといえば、日曜日

に美和をおぶって、社宅のまわりをひとまわりしてくるくらいでした。美和は、背中で揺られているとすぐに眠りました。

あのころ、もっとやれたはずだと、いまでも思います。文子は、そのことでわたしを責めたことは一度もありません。だからよけいに、思うのかもしれませんが。

昭和四十九年に、長男の誠が生まれました。誠が生まれたという知らせは、工場で聞きました。旋盤を止めて、手を洗って、それからまた旋盤に戻りました。その日の残りの仕事を、どうやって片づけたのかは覚えていません。

子どもがふたりになると、社宅の部屋は急に狭くなりました。ちゃぶ台に四人が座ります。誠はまだ座れませんから、文子のひざの上です。

誠は、這いはじめると、何でも手に取って回したがる子でした。目覚まし時計のねじ、ラジオのつまみ、たんすの引き出しの取っ手。回せるものは何でも回します。文子は「お父さんに似た」と言っていました。わたしは、自分が小さいころにどうだったのかは知りません。けれど、ふいごの取っ手を押すのは好きだった、と母から聞いたことがあります。美和は、自分の茶わんを自分で持ちたがりました。こぼしても、文子は手を出さずに見ていました。

誠が歩けるようになったころ、日曜の午後に、子ども二人を連れて、社宅の近くの川の土手へ行くことができました。美和は小石を拾っては川へ投げ、誠はわたしの手につかまって、水のほうへ行きたがりました。わたしは、朝倉町の川で正二をおぶっていたころの話をし

ましたが、二人とも、あまり聞いていませんでした。帰ると、文子が「二人とも、泥だらけ」と言って笑いました。

美和は、口の達者な子でした。三つ、四つになると、ちゃぶ台の前で、その日あったことを長々と話します。どこの犬がほえた、隣の子と砂場で何を作った。話はあちらこちらへ飛んで、なかなか終わりません。文子は相づちを打ちながら、誠に食べさせています。わたしは、箸を止めて聞いていました。

食卓で、わたしはひとつだけ決めていたことがあります。子どもが話しはじめたら、最後まで聞く。途中で口をはさまない。

わたしは口べたです。子どもの話にうまい返事をすることができません。工場では、わからないことがあれば手を動かして確かめればすみます。けれど、子どもの話は手で確かめることができません。うまく返せないのなら、せめて黙って最後まで聞こう。そう思ったのです。立派な考えがあったわけではありません。ほかにできることがなかった、というほうが近いと思います。

鍛冶場の音がやんだ年

昭和五十一年に、次女の由紀が生まれました。わたしは三十八になっていました。

由紀が生まれた年に、社宅で五人そろって撮った写真があります。五人がそろった最初の写真です。美和は四つ、誠は二つでした。誠がじっとしていなかったのでしょう。誠の顔だけ、少しぶれています。

同じ年、朝倉町の父が亡くなりました。父はしばらく前から体を悪くしていました。

知らせを受けて、わたしはひとりで夜行列車に乗りました。由紀は生まれたばかりでしたから、文子と子どもたちは青海省に残りました。十八の春に乗ったのと同じ方向の列車ではなく、反対に、朝倉町へ向かう列車です。窓の外が暗いあいだ、わたしはほとんど眠れませんでした。

父が由紀の顔を見たのかどうか、わたしははっきり覚えていません。写真を送ったような気がします。けれど、確かではありません。確かではないことを、確かなように書くことはしたくありません。

朝倉町の家に着くと、鍛冶場の火が落ちていました。

子どものころ、わたしは毎朝、父の槌の音で目をさましていました。家の隣の鍛冶場から、鉄を打つ音が聞こえてくるのです。その音が聞こえると、ああ朝だ、と思いました。あの音のしない朝倉町の家は、自分の生まれた家なのに、知らない家のようにでした。

通夜と葬式のあいだのことは、あまり覚えていません。親せきや町の人が大勢来て、わたしは頭を下げてばかりいました。

葬式がすんだあと、わたしはひとりで鍛冶場に入りました。炉の灰は冷たくなっていました。金床の横に、父の槌が置いてありました。手に取ると、柄のにぎるところが、父の手の形にすり減っていました。わたしの手には、少し合いませんでした。槌を金床に一度だけ当ててみようかと思いましたが、やめました。音を出してしまうと、何かが終わってしまうような気がしたのです。槌は、元の場所に戻しました。

家には母と正二がいました。わたしは長男でありながら、家を出て青海省で暮らしてきました。そのあいだ、父と母のそばにいたのは正

二です。そのことを思うと、正二に何と言えればいいのか、わかりませんでした。結局、たいしたことは言えなかったと思います。

青海市へ戻る列車のなかで、わたしはひとつのことを考えていました。父に、わたしの旋盤の仕事を、きちんと見せたことが一度もなかった、ということです。わたしは父の仕事を、子どものころから毎日見て育ちました。ふいごを押し、父が鉄を打つのを、すぐそばで見えていました。けれど、父はわたしの仕事を見たことはありません。見せる機会もありませんでした。

それでよかったのかどうか、いまもわかりません。

文子に、いつか鉄を打つ音を聞かせたいと思っていたことも、そのときに思い出しました。その音は、もう聞かせることができなくなりました。

青海市の駅に着くと、文子が由紀を抱き、美和と誠の手を引いて待っていました。文子は「どうでしたか」とだけ聞きました。わたしは、鍛冶場の音がしなかった、とだけ答えました。文子は何も言いませんでした。その晩も、五人でちゃぶ台を囲んで夕飯を食べました。由紀は文子のひざの上で眠っていました。

それからしばらく、社宅の暮らしは、三人の子どもでいっぱいでした。夜は二間に布団を敷きつめて、五人で寝ました。わたしが端、文子が反対の端で、子どもたちがそのあいだです。朝になると、誰かの足がわたしの顔の上ののっていることがありました。狭いとは思いましたが、いやだと思ったことはありません。

昭和五十三年の春には、美和が小学校に上がりました。その朝、文子は早起きして赤飯を炊きました。わたしは工場を休むわけにはいか

ず、社宅の門の前で、美和のかぶった帽子をまっすぐになおしてやってから出かけました。

日曜の朝の砥石

昭和五十四年、青海省の郊外に家を建てました。わたしは四十一でした。

子どもが三人とも大きくなってきて、社宅はもう手狭でした。五人でちゃぶ台を囲むと、ひじがぶつかるのです。

家を建てるにあたって、文子とふたりで決めていたことがあります。台所に、五人がゆったり座れる食卓を置くこと。ほかのことはずいぶん迷いましたが、それだけは最初から決まっていました。社宅のちゃぶ台は、物置にしまいました。家具はほとんど社宅から持ってきましたが、食卓だけは新しく買いました。木の、角の丸い、どっしりしたものです。小さな庭もできました。

引っ越しの日、子どもたちは、何もない部屋を走りまわっていました。社宅では、走ると隣から苦情が来ます。ここではもう、誰にも気がねがいりません。その晩、新しい食卓で初めて夕飯を食べました。文子が、誰がどこに座るかを決めました。わたしの席は、台所にいちばん近い端でした。文子は、子どもたちの顔が全部見える席に座りました。五人が座っても、ひじがぶつかりません。それだけのことが、ずいぶんうれしかったのを覚えています。

家が郊外になったので、工場へはバスで通うようになりました。社宅のころのように、歩いて十五分というわけにはいきません。朝は少し早く家を出るようになりました。そのぶん、夕飯に間に合わせるの

が前よりむずかしくなりました。それでも、日曜だけは、何があっても家にいるようにしました。

家ができた年に、家の前で五人並んで撮った写真があります。社宅のころの写真とくらべると、子どもたちはみな、ひとまわり大きくなっています。美和は七つ、誠は五つ、由紀は三つでした。

日曜日の朝、わたしは台所で包丁を研ぐようになりました。

社宅にいたころから、ときどきはやっていました。けれど、台所が広くなってからは、毎週の決まりごとになりました。前の晩から砥石を水に浸けておいて、朝ごはんの前に研ぎます。研ぎ方は、誰かに習ったわけではありません。子どもころ、鍛冶場で父が鎌を研ぐのを、毎日のように見ていました。それを見て覚えたのです。

砥石の上で刃を動かすと、シャツ、シャツ、という音がします。父の鍛冶場の音とはちがいます。それでも、刃物の音を聞いていると、朝倉町のことを思い出しました。父が亡くなってからは、なおさらでした。

研ぎ終わると、刃が立っているかどうかを、新聞紙で確かめました。古い新聞紙を一枚、片手で持って垂らし、上から刃を当てます。よく研げていれば、力を入れなくても、すっと切れていきます。研いでいるあいだは、ときどき刃の裏に指の腹を当てて、刃先のかえりが出ているかを確かめます。目で見るとより、指のほうが確かなのです。これも、父がやっていたのを見て覚えしました。父は鎌を研ぎながら、ときどき親指で刃先をなでていました。子どものわたしには、何をしているのかわかりませんでした。自分で研ぐようになって、やっとわかったのです。

美和が、それを見に来るようになりました。音で起きてくるのです。新聞紙が切れると、美和は「もう一回」と言いました。わたしはもう一枚新聞紙を持ってきて、また切って見せました。何度か切って見せるうちに、文子に「朝ごはんですよ」と呼ばれる。日曜の朝は、たいていそれで終わりました。

研いでいたのは、文子が嫁入りのときに持ってきた包丁です。研いだ日の夕飯ときには、文子が「よく切れる」と言ってくれました。わたしには、その一言で十分でした。

由紀は、もう少し大きくなると、砥石を浸けておく水を替える役を、自分で引き受けました。誰に頼まれたわけでもありません。日曜の朝、わたしが台所に行くと、砥石の入ったおけの水が、もう新しくなっていることがありました。

誠と自転車を直したのは、誠が小学二年のころですから、昭和五十七年ごろのことです。わたしは四十四でした。

ある日、誠が自転車を押して庭に入ってきました。「壊れた」と言います。ペダルをこぐとカタカタと音がして、前に進みにくいのだそうです。

わたしは、自転車を見て、どこが悪いのか、だいたいの見当はつきました。けれど、それは言いませんでした。

「回してみろ。音を聞け」

そう言うだけです。

誠は、後ろの車輪を浮かせて、ペダルを手で回しました。カタカタという音がします。誠は耳を車輪に近づけて、何度も回しました。わたしは横で見えていました。手は出しませんでした。

しばらくして、誠が「ここだ」と言いました。泥よけの金具が曲がって、回るたびに車輪に当たっていたのです。ペンチで曲がりを直し、ついでにチェーンに油をさしました。もう一度回してみると、音は消えていました。

そのときの誠の顔を、わたしはよく覚えています。自分で見つけた、という顔でした。誠はそのまま自転車にまたがって、庭を二、三周しました。もうカタカタとは鳴りません。文子が縁側から、そのようすを写真に撮っていました。庭で、わたしと誠が自転車の前にしゃがみこんでいる写真です。

それからというもの、誠は何か調子の悪いものがあると、わたしのところへ持ってくるようになりました。そのたびに、わたしは同じことを言いました。「回してみろ。音を聞け」。回せないものは、動かしてみろ、と言いかえました。誠は、そのうち、わたしのところへ持ってくる前に、自分で耳を近づけるようになりました。

先に答えを言わなかったのには、わたしなりのわけがあります。旋盤も、刃物の当たり方がおかしいと、音が変わります。音を聞けば、たいていのことはわかるのです。それに、人に言われて直したことはすぐに忘れますが、自分で見つけたことは忘れません。工場で覚えたやり方を、家でもしただけのことでした。

誠はいま、機械の設計の仕事をしています。あの自転車の日のことがあって、その仕事を選んだのだと誠が言っている、と美和から聞きました。わたしには、それほどのことをしたつもりはありません。自転車を一台、一緒に直しただけです。ただ、そう聞いたときは、うれしかったのです。

由紀は三人のなかでいちばん下で、包丁研ぎも自転車も、少しはなれたところから見ていました。食卓でも、由紀はいつも最後に話しました。上のふたりの話が終わるのを、じっと待っているのです。わたしは、由紀の番が来るまで、席を立たないようにしていました。由紀が話しはじめたら、やはり最後まで聞きました。

日曜の夕飯は、五人そろって食べることにしていました。食事のあいだはテレビをつけない、と決めたのは文子です。日曜の夕飯には、文子はたいてい煮物を作りました。大きな鍋にたくさん作って、五人で食べると、ちょうどなくなるのです。子どもたちが学校のこと、友だちのことを話し、わたしは黙って聞いていました。日曜の夕飯の食卓を写した写真が一枚残っていますが、それは子どもたちがもう少し大きくなってからのものです。この習慣は、それから長く続きました。

ふり返ってみると、子育ては、ほとんど文子にまかせきりでした。わたしがしたのは、日曜の朝に包丁を研ぐこと、壊れた自転車を子どもと直すこと、食卓に座って子どもの話を黙って聞くこと。そのくらいです。それが子育てと呼べるものだったのかどうか、わたしにはわかりません。

子どもが熱を出した夜も、学校の用事がある日も、たいていは文子がひとりで引き受けていました。わたしがそれを知るのは、夕飯の食卓で、文子が短く話してくれてからです。文子は、わたしが工場で何をしているのかを、事務所にいたころからよく知っていました。だから、家のことはわたしに持ちこまないようにしていたのだと思います。そのことに、わたしはずいぶん長いあいだ甘えていました。

ただ、手を動かして確かめる、ということだけは、自分の手でやってみせたつもりです。

日曜の朝の砥石の音と、自転車の車輪の音と、夕飯の食卓の子どもたちの声。あのころの家のことを思い出すと、まず音が浮かびます。子どものわたしにとって、家は鍛冶場の槌の音のする場所でした。わたしの子どもたちにとって、家はどんな音のする場所だったのか。いつか聞いてみたいと思いながら、まだ聞けずにいます。

昭和五十八年、工場に、それまでとはまったくちがう新しい旋盤が入ることになります。

第五章 工場の挑戦と失敗

数字で動く旋盤

昭和五十八年の春、東浜精機の工場に、初めて数値制御の旋盤が一台入りました。NC旋盤と呼んでいました。わたしは四十五になっていました。

据えつける前に、課長から、導入の担当をやってくれと言われました。わたしは「わたしでいいんですか」と聞き返しました。新しい機械なら、若い人のほうが向いていると思ったのです。けれど課長は「旋盤をいちばん長く触っているのは高橋だ」と言いました。そう言われると、断る理由が見つかりませんでした。

機械は、大きな木の枠に入って、トラックで運ばれてきました。重さがあるので、据えつける場所の床を補強するところから始まりました。木枠をばらして、中から緑色の機械が出てきたとき、班の者たちが集まってきて、遠巻きにながめていました。わたしも、そのうちの一人のような気持ちでいました。

それまでの旋盤は、ハンドルを手で回して刃物を動かします。どれだけ回せば何ミリ進むかは、目盛りを見て、あとは手が覚えています。削っては測り、測っては刃を少し送る。わたしの仕事は、ずっとその繰り返しでした。

NC旋盤は違いました。削る太さも、長さも、刃物を送る速さも、ぜんぶ数字に置きかえて、機械に指示します。その数字を、紙のテープに穴を開けて読ませるのです。テープは細長く、穴の並びが一行ずつ、刃物の一つひとつの動きになっていました。

機械を納めた会社の人が、二週間ほど教えに来てくれました。昼はその人について機械の前に立ち、夜は家に帰ってから、食卓の端で数字の並びをノートに書き写しました。子どもたちが寝たあとの食卓です。四十を過ぎて、また見習いに戻ったような気持ちでした。

教えに来た人は、わたしより一回りほど若い人でした。わたしが同じことを二度聞いても、いやな顔をせずに、もう一度紙に書いて説明してくれました。わたしのほうは、わからないことをわからないと言うのが、はじめは恥ずかしかったのです。班長をつとめて、三十年近く旋盤を回してきた者が、と思っていました。けれど、二日目には、そんなことを言っていられなくなりました。数字は、わかったふりをしても、機械がそのとおりに動いてくれません。

ある晩、ノートを書いていると、誠が起きてきて、横からのぞきこみました。誠は九つでした。数字と記号ばかりが並んだページを見て、「暗号みたい」と言いました。わたしは「そうだ。機械にしか読めん暗号だ」と答えて、誠を寢床へ戻しました。

教えに来た人が帰ってしまうと、あとは自分で考えるしかありません。わからないことがあると、機械に付いてきた厚い説明書を開きました。説明書の言葉は硬くて、一ページ読むのに一晩かかることもありました。

初めて自分で動かした日のことは、よく覚えています。テープを読ませて、ボタンを押しました。わたしはハンドルに触っていません。それなのに、刃物がすうっと材料に寄って行って、削りはじめました。

そのとき、わたしの手が勝手にハンドルを探して、宙に浮きました。何十年もハンドルを握ってきた手です。握るものがないと、どうしていいかわからないのです。手の置き場がない、と思いました。

削り終わった軸を外して、マイクロメーターで測りました。数字は合っていました。合っているのに、わたしはしばらく、その軸を手のひらの上で転がしていました。自分で削っていない軸を、どう受け取ったらいいいのかわからなかったのです。

音も、違って聞こえました。手回しの旋盤では、刃が鉄に当たる音を聞きながら、ハンドルの重さで加減をします。音が少しでも濁れば、手がすぐにゆるみます。NC旋盤でも、鉄を削る音そのものは同じでした。けれど、その音を聞いて手を動かす者がいません。音は鳴っているのに、それに返事をする者がいない。そういう感じがしました。

一度、テープの穴を一つ開けまちがえて、刃物が思ったより深く材料に入りかけたことがあります。あわてて、止めるボタンを押しました。材料が一本だめになっただけで済みましたが、背中に汗をかきました。手回しなら、手が途中でおかしいと気づいて止まります。機械は、数字に書かれたとおりに動いて、自分からは止まりません。そのことを、わたしはそのとき体で覚えたつもりでした。

工場の中には、長く手回しの旋盤をやってきた人がたくさんいました。その中には「あれは機械が削るんで、人が削るんじゃない」と言う人もいました。わたしも、半分はそう思っていました。けれど、担当になった以上、この機械を使えるようにしなければなりません。どちらの言い分もわかるので、その間に立つのは楽ではありませんでした。

わたしは、手回しの旋盤をやめるつもりはありませんでした。NC旋盤のとなりには、それまでの旋盤も並んでいました。NC旋盤で削った試しの軸を、古くからの人たちに見せて、手で測ってもらったこともあります。測った人は、黙って軸を返してきました。何も言わないのが、その人たちの答えでした。

そのころ、機械の前で撮った写真が一枚残っています。誰が撮ってくれたのかは、もう覚えていません。この本のための聞き取りの席で、美和がその写真を見て「お父さん、顔がかたい」と言いました。かたかったでしょう。あのころのわたしは、まだ何もわかっていなかったのです。

はじめのうちは、NC旋盤で削った軸も、一本残らず自分で測りました。まだ機械を信用していなかったのです。けれど、測っても測っても、数字は合っています。合うたびに、測る手が少しずつ軽くなっていきました。

秋になるころには、だいぶ慣れてきました。慣れてみると、NC旋盤はたいしたものでした。同じ軸を何十本削っても、太さがそろうのです。手で削るときは、一本ごとに測って、刃を少しずつ送っていました。それが、いけないのです。

これは手より正直だ、と思いました。

そのころ、日曜の夕飯の食卓で、誠に「お父さん、新しい機械はどう」と聞かれたことがあります。わたしは「まだ、機械のほうが上手だ」と答えました。誠は、よくわからないという顔をしていました。

いま振り返ると、その思いが、翌年の間違いのもとになりました。

百分の一ミリ

昭和五十九年、新しい部品の仕事が来ました。よその会社の機械の中で回る、細い軸です。軸のある部分には、軸受けという部品がはまります。軸受けは、軸がなめらかに回るように支える、輪のような部品です。その太さの許し幅は、百分の一ミリでした。それより太くても細くても、軸受けはうまくはまりません。

それまで、こういう軸は、二台の旋盤で二回に分けて削っていました。一台目でおおよその形に荒く削り、二台目で仕上げるのです。わたしはそれを、NC旋盤一台で、一度に仕上げてしまう工程に組みかえました。手間が半分になります。

それだけではありません。二台で削ると、一台目から二台目へ材料を付けかえるたびに、ほんのわずか、回る中心がずれることがあります。一度に仕上げれば、そのずれが起きません。わたしは、いいことばかりだと思っていました。工場にとっては、新しい工法でした。工程を組んだのは、わたしです。

そして、もう一つ、わたしが決めたことがあります。

それまで、仕上げた軸は十本に一本、マイクロメーターで測っていました。マイクロメーターというのは、ねじの仕組みで、ごく細かい

太さまで測る道具です。百分の一ミリよりも、さらに細かく読めます。わたしはそれを、朝いちばんの数本をよく測って、合っていれば、あとは昼と夕方に一本ずつ測る、というやり方に変えました。

機械は、同じ数字なら同じに削る。わたしはそう思い込んでいました。前の年の秋に見た、そろった軸の列が、頭にあったのです。班の若い人に「そこまで測らんでいい」と言ったのも、わたしでした。

その年の初夏、納めた軸の一部が、軸受けにはまらないと言って、取引先から返されてきました。その月に納めた数の、およそ一割でした。

返された軸は、一本ずつ油紙に包まれて、木の箱に入って戻ってきました。わたしたちが納めたときと同じ包み方です。箱のふたを開けたとき、自分が包んで送り出したものが帰ってきた、と思いました。

返された軸を一本ずつ測りました。目盛りが合わないのを見て、二度、三度と測りなおしました。測りまちがいであってほしかったのです。午後に削った軸が、許し幅をわずかに外れて、太かったのです。朝の軸は、合っていました。

原因がわかるまでに、少しかかりました。

はじめは材料を疑いました。次に刃物を疑いました。どちらも違いました。疑ったところが一つずつ外れていくと、最後に残ったのは、わたしの決めたことでした。わかってみれば、旋盤をやる者なら知っているはずのことでした。

機械は、朝はまだ冷えています。それが何時間も回りつづけるうちに、主軸のまわりが温まってきます。金属は温まると、ほんのわずかに伸びます。目には見えないほどの伸びです。刃物にかける油も、昼を

過ぎると温まってきます。そうすると、同じ数字で削っていても、午後には刃先の当たるところがずれて、削れる太さが変わってしまうのです。

手回しの旋盤なら、わたしたちは一本ごとに測っていましたから、そのずれに手が自然と合わせていました。自分で合わせているとも思わずに、合わせていたのです。NC旋盤では、その役をする手が、もうありませんでした。

わたしは、朝の冷えた機械で数字を決めました。そのうえで、測る数を減らしました。午後のずれに気づく機会を、自分で取り上げていたのです。

機械のせいではありません。測るのをやめたのは、わたしです。

原因がわかった日、わたしは課長に、担当を降りたほうがいいのではないかと言いました。課長は「調べたのは高橋だ。直すのも高橋がやれ」と言いました。

課長と二人で、取引先へ謝りに行きました。そこでのことは、ここには書かないでおきます。

工場に戻った次の朝、班の集まりで、若い人たちに言いました。「測らんでいいと言ったのは、わたしだ。わたしの間違いだ」。誰も、何も言いませんでした。若い人たちは、わたしの言ったとおりにやっていただけです。それを、自分たちのせいだと思わせたくありませんでした。

返された分は、作り直して納めなければなりません。新しい工程ができるまでのあいだは、昔のやり方に戻しました。二台の旋盤で二回に分けて削り、一本ずつ手で測ったのです。班のみんなが残業をし

て、作り直した分を納めました。わたしが組んだ工程の後始末を、班の全員にさせることになりました。

返品の知らせを聞いた日は、どうやって家まで帰ったのか、よく覚えていません。気がつくと、家の前に立っていました。布団に入っても、軸の太さの数字が、頭の中で回りつづけていました。

その年、わたしは毎晩、遅く帰りました。

家では、仕事の話はしませんでした。夕飯のとき、子どもたちは学校であったことを話します。わたしはそれを、黙って聞いていました。美和は十二、誠は十、由紀は八つでした。三人とも、よくしゃべりました。

子どもたちの話を聞いているあいだだけは、軸のことを忘れていられました。それで、黙って聞いていたのかもしれない。

文子にだけは、子どもたちが寝たあと、台所で話しました。

文子は、もとは東浜精機の事務所にいた人ですから、工場のことは少しわかっていました。何があったか、何を間違えたか。文子は口をはさまずに聞いて、最後に「ご飯だけは食べてください」と言いました。

この本を作ることになって、美和が、あの年のことを覚えていると言いました。お父さんは夜遅く帰ってきても、食卓では仕事の話をしなかった。お母さんだけは知っていた、と。

わたしは、気づかれていないと思っていました。子どもというのは、ちゃんと見ているものです。

線は正直でした

調べ直しは、その年の夏から始めました。

一週間、削った軸を一本残らず、マイクロメーターで測りました。測った太さと、削った時刻を、一本ずつ方眼紙に点で打って行きました。横が時刻、縦が太さです。

班の若い者が二人、交代で測るのを手伝ってくれました。一本測るたびに時計を見て、時刻を書きこみます。一日に百本あまりを測るので、夕方には指先がしびれていました。

一週間分の点を並べてみると、朝から夕方へ向かって、少しずつ右上がりになる線が出ました。毎日、同じ形の線です。機械が温まるにつれて、軸が太くなっていく。その様子が、紙の上にそのまま出ていました。

月曜の朝の点は、ほかの日よりも少し低いところから始まっていた。日曜の休みのあいだに、機械がすっかり冷えていたのです。

線は正直でした。わたしより、ずっと。

点を打ちおえた晩、その方眼紙を家に持って帰りました。食卓には広げず、鞆に入れたまま寝ました。あの紙は、退職するまで、わたしの道具箱の底に入れておきました。

その線を手がかりに、工程を作り直しました。

まず、始業前に三十分ほど、機械を空で回して温めておくことにしました。冷えた機械と温まった機械の差を、できるだけ小さくするためです。

三十分に決めるまでにも、何度か試しました。十五分では、まだ温まりきりません。一時間回すと、そのぶん仕事の時間が減ります。毎

朝、空回しのあとに一本削って測り、方眼紙の点と比べて、三十分に落ち着きました。

次に、測るのを十本に一本に戻しました。測った数字は、機械の横に下げた紙に書きこみます。そうすると、ずれが出はじめたのが、数字の並びでわかります。ずれが出はじめたら、刃物の位置を数字で少し戻します。どれだけ戻せばよいかの目安は、あの方眼紙の線から決めました。

それから、仕上げる前に一度機械を止めて、測る手順も入れました。一度に仕上げるという新しい工法の形は残して、その途中に、人の手で確かめるところを入れ直したのです。

決めた手順は、厚紙に大きな字で書いて、機械の横に下げました。わたしが休んだ日でも、誰が機械の前に立っても、同じようにやれるようにするためです。

言葉にすると、それだけのことです。けれど、それぞれの数字を決めて、班のみんなが同じようにやれるようにするまでに、一年あまりかかりました。夜遅く帰る日は、そのあいだも続けました。

うまくいかない日も、何度もありました。補正の数字を決めたつもりでも、夏と冬とでは、工場の中の温度が違います。冬の朝は、機械がいつそう冷えています。夏の午後は、いつそう温まります。それで、季節ごとに、方眼紙をもう一枚ずつ作りました。

昭和六十一年、作り直した工程で、量産が安定しました。返品は、もう出なくなりました。

安定したとわかったのは、ある日突然ではありません。返品のない月が一月、二か月と続いて、課長が「もう大丈夫だろう」と言いま

した。それで、記念に写真を撮ろうということになったのです。

その日の記念に、機械の前で写真を撮りました。班の者たちは後ろ姿で写っています。わたしは四十八でした。

班の者たちが後ろ姿なのは、照れて、誰も前を向こうとしなかったからです。うれしいというより、ほっとしました。写真のわたしの顔も、たぶん、そういう顔をしていると思います。

いまでも、ときどき考えます。あのとき、測るのを減らさなければよかった。そう思います。けれど、減らさなければ、温まる機械の癖には気づかなかったかもしれません。気づかないまま、もっと大きな失敗をしていたかもしれない。どちらがよかったのか、わたしには、いまもわかりません。

ただ、一つだけ、はっきりしていることがあります。機械がどれだけ正直でも、その正直さを確かめるのは、人の手だということです。

昭和六十三年、母のキヨが亡くなりました。わたしは五十でした。知らせを受けて、朝倉町へ帰りました。朝倉町に残った正二が、母の近くにいてくれました。

正二には、母のことをずっと任せきりでした。そのことも、そのとき思いました。

青海市に戻った次の朝も、わたしはいつもどおり工場へ行きました。始業前の三十分、機械を空で回しました。

母の手は、田畑の仕事で、指の節が太くなっていました。そのことを、覚えています。母のことで話せるのは、それくらいです。

手を動かして、確かめる

あの返品のあとから、わたしには、若い人に教える役が増えていきました。

失敗のあとで、わたしの手もとに何が残ったかと考えると、あの方眼紙と、測ることをやめてはいけないという、それだけでした。それなら、それを渡していこうと思いました。

新しく入った人には、いきなりNC旋盤を触らせませんでした。まず、手回しの旋盤で一本削ってもらいます。ハンドルを回して、削って、測って、また回す。それをひと通りやってから、NC旋盤の前に立ってもらいました。

若い人たちは、はじめは手回しの旋盤を面倒がりました。NC旋盤があるのに、なぜ、という顔をします。わたしも、四十五のときには、あれと同じような顔をしていたはずです。向きが逆なだけでした。

手回しで削ると、刃が鉄に当たる音や、ハンドルの重さで、いま何が起きているのかがわかります。それを一度でも体で知っていれば、NC旋盤の前に立っても、音や削りくずの様子がおかしいときに気づけます。

NC旋盤の仕事でも、マイクロメーターで、自分の手で測らせました。機械が数字を出してくれても、その数字が本当かどうかは、手で測ってみなければわからない。わたしは、そう教えました。

一度、若い人が、数字が合っているからと、測るのを飛ばしかけたことがありました。わたしは叱りませんでした。その代わり、その日の残りの軸を、二人で並んで一本ずつ測りました。あくる日から、そ

の人も黙って測るようになりました。叱るより、一緒に測るほうが伝わることもあると、そのとき思いました。

そのころ教えた若い人たちの中には、のちに班長になった人もいます。その人たちが、また次の若い人に、手で測ることを教えていったと聞きました。

そして、あの方眼紙を見せました。昭和五十九年の、右上がりの線です。これは、わたしの失敗の線だ、と自分から話しました。隠しておくより、見せたほうが役に立つと思ったのです。

そのころのわたしは、「手を動かして、確かめる」と何度も言っていました。前から口にしていた言葉です。けれど、あの年からは、言うたびに、自分に向かっても言っているような気がしていました。

あまり何度も言うので、若い人に「また、それですか」と笑われました。笑われても、言いました。

平成二年、若い人に技能を教える取り組みで、社内表彰を受けました。わたしは五十二でした。

表彰状は、工場の朝礼で手渡されました。班の者たちが拍手をしてくれました。

表彰状には、こう書いてあります。「数値制御旋盤の導入にあたっては工程の改善に力を尽くされました」。そして、「若い工員に手を取って技能を伝え」とあります。

工程の改善というのは、あの作り直しのことです。わたしの間違いから始まったことです。失敗した者が表彰されるのは、妙な気持ちでした。

表彰状は、額には入れませんでした。たたんで、筆筒の引き出しにしまいました。

持って帰った晩、文子が表彰状を読みました。読み終えて、「手を取って、と書いてありますね」と言いました。わたしは、何と答えたのか覚えていません。

その年に、若い工員に旋盤を教えているところを撮った写真も残っています。若い人は後ろ姿で、わたしはその横で、何か言っています。若い人の手もとを、のぞきこむようにしています。たぶん、また同じことを言っているのでしょう。

それから、わたしは工場で旋盤で部品を削り、若い人に教えました。NC旋盤の台数も増えていきました。新しい機械が入るたびに、若い人たちのほうが先に覚えるようになりました。それでいいのだと思いました。わたしの役目は、覚えた人に、手で測ることを忘れさせないことでした。

五十を過ぎると、マイクロメーターの細かい目盛りを読むのに、時間がかかるようになりました。眼鏡をかけて読みました。若い人に教えながら、わたしも一本ずつ測りました。

退職の何年か前、班の若い人が、自分で買ったというマイクロメーターを見せに来たことがあります。給料をためて買ったのだそうです。わたしはそれを手に取って、目盛りを一度回してみしてから返しました。「大事に使い」とだけ言いました。

平成十年、六十で、東浜精機を定年で退職しました。十八の春に入ってから、四十二年が過ぎていました。

最後の日、わたしは自分が使ってきた旋盤を掃除しました。手入れた刃物は、若い人に渡しました。

班の者たちが機械の前に並んで、あいさつをしてくれました。わたしは何を話したのか、よく覚えていません。あとで若い人の一人が、「最後まで『手を動かして、確かめる』でしたよ」と教えてくれました。

工場の門を出るとき、一度だけ振り返りました。十八で初めてくぐった門です。そのときのことを、思い出していました。

わたしが削った部品は、よその機械の中に入って、わたしの知らないところで回っています。いまも、どこかで回っているものがあるかもしれません。手で確かめた部品が、遠くの機械の中で動いている。それが、わたしの仕事の誇りでした。

その日、わたしは作業着を家に持って帰りました。工場の油のにおいが、しみついた作業着です。

文子が洗うと言いました。けれど、これは自分で洗うと言って、風呂場でもみ洗いしました。四十二年分の油は、一回では落ちませんでした。何度か水を替えて洗い、干して、乾いたのをたたんで、しまいました。

あとになって誠が、あの日のことを覚えていると言いました。わたしは、誰かに見られているとは思っていませんでした。また、気づかれていたわけです。

第六章 喪失を抱えて続けた日々

町に残った弟

正二は、わたしより四つ下の弟です。昭和十七年に、朝倉町の川沿いの家で生まれました。子どものころは、どこへ行くにもわたしのあとをついてきました。川で魚をとるときも、父の鍛冶場をのぞきに行くときも、正二はいつも少しくしろにいて、わたしのすることを黙って見ていました。

昭和三十一年の春、わたしは集団就職の列車で青海市へ出ました。駅には母と正二が見送りに来てくれました。そのときから、わたしは町を出た者になり、正二は町に残った者になりました。

誰かがそう決めたわけではありません。父から、おまえが出ろ、おまえが残れと言われたこともありません。けれど、長男のわたしが町を出ていけたのは、正二が残ってくれたからです。そのことに、わたしは長いあいだ、はっきりとは気づかないふりをしていたように思います。気づいてしまうと、何か言わなければならないからです。

町に残った正二は、母のそばにいてくれました。母が亡くなるまで、近くで様子を見てくれたのも正二です。わたしは青海市で工場に通い、家族を養うことで手いっぱいでした。年に何度か帰るだけの長男に、正二は一度も文句を言いませんでした。言ってくれたほうが良かったかもしれない、と思うこともあります。

正二は、口数の少ない男でした。電話をかけてきても、用件だけを言って切ります。手紙はほとんど書きませんでした。その代わり、秋になると、家の柿を箱に詰めて送ってきました。箱の中に手紙は入っていません。柿だけです。礼状を書くのは、いつも文子でした。わたしは電話で「着いたぞ」と言うだけで、正二も「そうか」と言うだけでした。兄弟そろって、言葉の少ない家に育ったのです。

正二は、やがて父の鍛冶場をたたみ、町の農機具店に勤めるようになりました。

たたむことにした、と正二から聞いたのは電話でした。用件だけを短く言う、いつもの話し方でした。わたしは「そうか」と言いました。それしか言えませんでした。

あのとき、ほかに何と言えばよかったのか、いまでもわかりません。鍛冶場を継がなかったのはわたしです。そのわたしが、たたむなとは言えません。かといって、たためばいいと言うのも違います。父が毎日火を入れていた場所を、弟ひとりに決めさせてしまった。そう思うと、受話器を持ったまま、言葉が出てこなかったのです。

正二は、それ以上のことは何も言いませんでした。父の金床だけは、勤め先の店の裏の物置に運んだと、あとになって聞きました。捨てるわけにはいかんかった、と正二は言っていたそうです。わたしはそれを聞いて、少しだけほっとしました。ほっとしていい立場ではないのですが、ほっとしました。

農機具店で、正二は耕運機や草刈り機を直していました。盆や正月にわたしが帰ると、町の人から「機械のことは正二さんに見てもらえば間違いない」と言われるのを何度も聞きました。正二は子どものこ

ろから、ふいごの音や鉄を打つ音を聞いて育っています。機械の調子を音で聞き分けるのは、父ゆずりだったのだと思います。

一度だけ、正二の勤める店に寄ったことがあります。正二は直しかけの耕運機のエンジンをかけて、「兄ちゃん、聞いてみい」と言いました。わたしには、どこが悪いのかわかりませんでした。正二は「ここが、かすれとる」と言って、耳をかたむけたまま、少しずつねじを回していきました。音がそろったところで手を止めて、わたしの顔を見て、少しだけ得意そうな顔をしました。工場で旋盤の音を聞いてきたつもりのわたしより、正二の耳のほうがよかったのです。わたしはそれを口には出さず、「うまいもんだな」とだけ言いました。

帰るたびに、正二は駅まで車で迎えに来てくれました。家までの道のあいだ、二人で話すのは、たいてい機械のことでした。

正二は、駅からの帰り道、父の金床を置いた店の裏の物置の前で、決まって車を止めました。中に入るわけではありません。ちょっと止まって、また走りだすのです。わたしも、何も言いませんでした。

ある年の正月、正二はハンドルを握ったまま、こう言いました。
「兄ちゃん、いまの機械は中が見えん」

工場で数値制御の旋盤を入れたとき、わたしも同じことを感じていました。手で確かめられないものを、どう信じればいいのか。町と工場とで場所はちがっても、兄弟で同じところにつまづいていたのです。

そのことを、正二には話しませんでした。話せばよかったと、いまは思います。

川原を歩いた日

平成二十年ごろの秋、文子と二人で朝倉町へ帰りました。わたしは七十、正二は六十六になっていました。

正二はそのころ、体を悪くしていました。歩くのが、前よりずいぶんゆっくりになっていました。わたしのほうも、もう速く歩けるほうではありません。二人並ぶと、ちょうどいい速さでした。

「川原まで行ってみるか」

そう言いだしたのは、正二でした。二人で、ゆっくり歩いていきました。

途中で何度か立ちどまりました。正二が休みたいのだろうと思って、わたしのほうから足を止めると、正二は「兄ちゃんが疲れたんか」と言います。わたしは「そうだ」と答えました。どちらが疲れていたのかは、どちらも言いませんでした。文子は少しうしろを歩いて、二人のやりとりを聞いていました。

道ばたの家は、ずいぶん建てかわっていました。子どものころに通った道の角の店はなくなり、田んぼだったところに家が建っていました。それでも、川に近づくにつれて、水の音が聞こえてきます。その音だけは変わっていませんでした。正二が「音は同じやな」と言い、わたしも「同じだな」と言いました。

川原は、思っていたよりも小さく見えました。

そのうち、正二が言いました。

「兄ちゃん、ここで一回、川に落ちたろう」

「落ちたのは、おまえだ」

わたしがそう言い返すと、正二は「いや、兄ちゃんだ」とゆずりません。魚をとって足すべらせ、ずぶぬれで家に帰って母にしか

られた。そこまでは二人とも同じように覚えているのに、落ちたのがどちらなのかだけが、食いちがっているのです。言い合っているうちに、二人で笑ってしまいました。どちらが落ちたのか、いまでも決着はついていません。

帰りぎわに、文子が「二人、並んで」と言って、写真を撮ってくれました。それが、わたしと正二と一緒に写った最後の写真になりました。

写真の中で、わたしと正二は少しはなれて立っています。肩も組んでいません。二人とも、川のほうを見えています。いまその写真を見ると、もう少し近くに立てばよかったと思います。最後の写真になると知っていたら、そうしたかもしれません。けれど、知っていたら、たぶんかえってぎこちなくなっていて、ああいう顔にはならなかったでしょう。

川原を歩きながら、わたしはひとつ、正二に言おうと思っていたことがありました。

「残ってくれて、ありがとう」

その一言です。町を出たわたしの代わりに、母のそばにいてくれたこと。鍛冶場のことを、ひとりで決めてくれたこと。それを、一度くらいは言葉にしておこうと思っていました。

言いませんでした。川の音を聞きながら、どちらが落ちたかで笑っているうちに、言うきっかけがなくなってしまいました。言えば、正二はきっと「何を言ひよる」と照れたでしょう。そう思うと、言わなくてもわかっているだろうという気持ちのほうが、勝ってしまったのです。

弟を見送る

平成二十一年の冬、正二が亡くなりました。

最後に話したのは、その少し前の電話でした。体の具合をたずねると、正二は具合のことには答えずに、こう言いました。

「兄ちゃん、こっちは心配いらんで」

わたしはまた、「そうか」と言いました。鍛冶場をたたむと聞いたときと同じ言葉です。わたしは正二に、いつも「そうか」としか言わない兄でした。

知らせを受けて、文子と朝倉町へ向かいました。正二を送る日のことは、細かくは覚えていません。覚えているのは、そのあと一人で、鍛冶場のあった場所まで歩いたことです。

鍛冶場の跡は、空き地になっていました。草が生えていて、そこに火があったことも、鉄を打つ音がしていたことも、もうわかりません。それでも、裏の川の音だけは、子どものころと同じように聞こえていました。

父が亡くなり、母が亡くなり、そして正二がいなくなりました。朝倉町とわたしをつないでいた糸が、急に細くなったような気がしました。町には正二の家族がいて、いまでも行き来はあります。けれど、あの町で生まれて、あの鍛冶場の音を一緒に聞いて育った者は、わたしひとりになってしまったのです。

わたしは、泣いたかどうかを覚えていません。ただ、川原で言いそびれた一言のことを、帰りの列車の中でずっと考えていました。言えばよかった。けれど、言わなかったことで、正二とのあいだに何か足

りないものがあつたのかと言われると、そうも思えないのです。言わずにすんだのは、言わなくてもすむ兄弟だったからかもしれない。どちらなのか、いまでも決められずにいます。

青海市にもどってしばらくしてから、わたしは文子に、川原で言いそびれたことを話しました。台所で、お茶を飲みながらだったと思います。文子は少し考えてから、こう言いました。

「正二さんは、わかっていたと思うよ」

文子がそう言ってくれたことで、わたしは少し楽になりました。けれど、わかっていたかどうかは、正二にしかわかりません。わたしはそれ以上、何も聞きませんでした。

その年の秋、柿は届きませんでした。届かないことはわかっていたのに、秋になると、玄関に箱が置かれていないかを見てしまいました。

川原の写真は、文子が焼きましをして、茶だんすの上に立ててくれました。わたしは毎日その前を通りますが、立ちどまって見ることはあまりありません。見なくても、どこに何が写っているかはわかっています。はなれて立つ二人と、その向こうの川です。たまに立ちどまるのは、正二の顔ではなく、二人のあいだのすきまを見るときです。あのすきまは、写真の中ではもう縮まりません。

台所のお茶

平成十年に東浜精機を退職してから、わたしと文子の暮らしには、新しい時間がひとつ加わりました。朝ごはんのあと、台所の食卓で二人でお茶を飲む時間です。

会社に勤めていたころは、朝のお茶をゆっくり飲んだ覚えがありません。湯のみを立ったまま空けて、家を出るのが毎朝でした。退職して、はじめて座ってお茶を飲んだ朝、文子に「あなた、お茶ってこんなに熱かったかね」と言って笑われたのを覚えています。それまで、熱さを確かめる暇もなく飲んでいたのです。

退職してすぐのころは、わたしが一日じゅう家にいるので、文子のほうが勝手がちがったようです。ある朝、文子に「朝からずっとおられると、台所がせまい」と言われました。四十年あまり工場の旋盤の前が自分の持ち場だったわたしには、家の中に自分の持ち場がありませんでした。台所は文子の持ち場で、わたしはそこに入りこんだ客のようなものです。それでも、朝のお茶の時間だけは、二人の時間として残りました。お茶を飲み終えると、わたしは外へ出て、文子は台所を片づける。そういう順番が、いつのまにかできていきました。

退職した年の秋、文子と二人で、はじめて昼間に近所の道を歩きました。工場に通っていた四十年あまり、昼の町を歩いたことはほとんどありません。文子は「あなた、この道、知らなかったでしょう」と言いました。知りませんでした。

文子の湯のみは、白地に藍色の線が一本入ったものでした。わたしのは、大きな無地の湯のみです。文子はいつも、先にわたしのに注いで、それから自分のに注ぎました。

二人で話すのは、天気のこと、子どもたちのこと、その日の畑のこと、といったことでした。話すことがない朝もありました。それでも、二杯目まで飲んでから立ちました。

雨の日は畑に出られないので、三杯目まで飲むこともありました。文子は「雨の日のお茶は長いね」と言いました。何も話さずにお茶を飲んでいても、気づまりではありません。長いあいだ同じ食卓についてきた二人というのは、そういうものかもしれません。

お茶の淹れ方は、文子に教わりました。わたしが沸いたばかりのお湯をそのまま急須に入れようとすると、文子は「お湯は、ひと呼吸おいてから」と言いました。わたしは言われたとおりにお湯を冷まし、それから湯のみを手のひらで包んで、熱さを確かめました。文子はそれを見て、「工場の人は、なんでも手でさわるね」と言いました。旋盤の前で、削った部品を手で確かめていたころの癖が、台所でも抜けなかったのです。

平成二十六年ごろの写真に、台所でお茶を飲むわたしと文子が写っています。誰が撮ったのか、覚えていません。たぶん、子どもの誰かが帰ってきたときだったと思います。二人とも、カメラのほうを見ずに、湯のみを持っています。

その写真の文子は、少しやせています。そのころ文子は体を悪くしていて、少しずつ弱っていっていました。台所に立つ時間が短くなり、朝のお茶は、わたしが淹れるようになりました。

わたしの淹れたお茶を飲んで、文子は「あなたのお茶は濃いね」と言いました。ひと呼吸おくのを忘れたわけではないのですが、葉の量の加減が、どうしてもうまくいかなかったのです。

文子は食卓のいすに座ったまま、「葉はひとさじでいいの」と言いました。わたしは「ひとさじ入れとる」と答えました。文子がわたしの手元をのぞきこんで、「それは山盛りでしょう」と言いました。旋

盤なら百分の一ミリまで合わせられるのに、茶さじひとつの加減がわからない。文子はそれをおかしがって、笑いました。そのころの文子が笑ったのを、わたしはそれでよく覚えています。

それでも文子は、濃いと言いながら、残さずに飲みました。わたしは毎朝、文子が湯のみを置くのを見てから、自分のを飲みました。

平成二十七年の春、文子が亡くなりました。結婚してから、四十五年でした。

文子が弱っていった日々のことは、ここにはあまり書きません。わたしの中で、まだうまく言葉になっていないからです。

文子を送ったあと、子どもたちが何日か泊まっていきました。みんなが帰って、ひとりで台所に立った最初の朝のことは、よく覚えています。お茶を淹れようとして、茶葉の缶がどこにあるのか、わからなかったのです。弱ってからも、文子は台所のものの置き場所を変えさせませんでした。わたしは文子に言われるままに、缶を出し、急須を出していただけでした。戸棚をひとつずつあけて、ようやく缶を見つけたとき、四十五年いっしょに暮らして、わたしはこの台所のことを何も知らなかったのだと思いました。

ひとつだけ書いておくと、わたしは文子に、ちゃんと「ありがとう」と言ったかどうか、覚えていません。言ったような気もします。言わなかったような気もします。正二のときと同じで、言わなくてもわかっているだろうと思っていたのかもしれませんが。正二のときに、あれほど言えばよかったと思ったのに、わたしは同じことをくり返したのかもしれない。そう思うと、自分でも情けない気持ちになります。

二つの湯のみ

文子がいなくなっても、わたしは朝のお茶を淹れつづけました。

食卓に、湯のみを二つ出しました。わたしの無地の湯のみと、文子の藍の線の湯のみです。急須からお茶を注ぐときは、文子が行っていたのと同じように、先にわたしのに注ぎ、それから文子のに注ぎました。

どうしてそうしたのか、自分でもうまく言えません。うっかり二つ出してしまったのではありません。わかっていて、出しました。文子の湯のみに注いだお茶は、飲む人がいないので、昼すぎまで食卓に置いておきました。冷めたら、流しに捨てて、湯のみを洗って、棚にもどしました。そして次の朝、また出しました。

夏は、お茶がなかなか冷めません。昼をすぎても、湯のみにさわると、まだぬくもりが残っていました。冬は、すぐに冷めました。わたしは毎日、捨てる前に湯のみに手をあてて、冷めたかどうかを確認しました。確かめなくても、時間がたてば冷めているのはわかっています。それでも、手でさわってから捨てました。

子どもたちは、そのことを知っていました。様子を見に来たときに、食卓に湯のみが二つ並んでいるのを見たはずですが、誰も何も言いませんでした。やめろとも、続けろとも言いませんでした。わたしはそれが、ありがたかったと思います。

美和も誠も由紀も、それぞれの家と仕事があります。それでも、かわるがわる電話をくれました。電話はたいてい夕方、「ごはん食べ

たか」と聞かれます。わたしは「食べた」と答えます。本当に食べた日もあれば、そうでない日もありました。朝のお茶のことは、電話では誰も聞きませんでしたし、わたしも話ませんでした。

家の中は、静かでした。工場にいたころは、旋盤の音のなかで一日を過ごしていました。退職してからも、台所には文子が動く音がありました。湯をわかす音、戸棚をあける音、ふきんをしぼる音です。それがなくなると、自分の立てる音ばかりが聞こえます。湯のみを食卓に置く音が、こんなに大きかったかと思いました。

そうして一年ほどたったころのことです。

ある朝、いつものように棚から湯のみを出そうとして、手が止まりました。文子の湯のみに手をのばしかけて、そのまま止まったのです。やめようと決めていたわけではありません。誰かに何か言われたわけでもありません。頭で決めるより先に、手のほうが止まりました。

わたしはしばらく、そのまま棚の前に立っていました。それから、文子の湯のみは棚にもどして、自分の湯のみをひとつだけ食卓に出しました。その朝は、ひとりでお茶を飲みました。次の朝も、湯のみはひとつでした。それからずっと、ひとつです。

やめてよかったのかどうかは、いまもわかりません。文子を忘れたからやめたのではないことは、自分でわかっています。けれど、では何がわたしの手を止めたのかと聞かれると、うまく答えられないのです。一年かかって、手のほうが先に、文子がいないことを確かめたのかもしれない。旋盤の前で、目で見ると先に手で寸法の狂いに気づいたように。

文子の湯のみは、いまま台所の棚に置いてあります。どこへもやるつもりはありません。

朝のお茶は、いまま淹れています。お湯はひと呼吸おいてから。葉の量は、文子に言わせれば、たぶんまだ濃いでしょう。

正二がいなくなり、文子がいなくなっても、朝は来ました。わたしは毎朝お湯を沸かし、湯のみを手で包んで、熱さを確かめました。大きなことをしたわけではありません。手を動かして、確かめる。わたしにできたのは、それを毎朝くり返すことだけでした。それで悲しみが消えたわけではありません。ただ、手を動かしているあいだに、一日がはじまってくれたのです。

第七章 退職後の菜園と孫

裏の畑を借りる

平成十年に東浜精機を定年で退いて、次の年の春、家の裏の畑を借りました。わたしは六十一になっていました。

勤めていたころの癖で、休みになっても朝は早くに目がさめます。目がさめると、手が何かを探します。工場では四十年あまり、毎日、削って、測って、また削っていました。それがなくなると、手のやり場がないのです。新聞を広げても、半分ほどで字の上を目がすべっていきました。文子は、そんなわたしを見ていたのでしょうか。ある朝、「裏の畑、何年も空いたままですよ」と言いました。

家の裏には、もとは畑だった土地があって、何年も誰も手を入れていませんでした。持ち主に話をして、借りることになりました。広さは、六畳間を四つ並べたくらいです。借りるときの細かいことは、ここには書かないでおきます。

鋤は、朝倉町の正二に頼んで、実家の納屋に残っていた父の鋤を一本送ってもらいました。柄は古くなっていたので、わたしが新しく付けかえました。刃の肩のところに、父の槌のあとが小さく並んでいます。それを指でなぞると、鍛冶場の火の色を思い出しました。正二は電話で、「兄ちゃんが畑か」と笑っていました。

最初の日、文子と二人で鍬を入れてみました。ところが土が、思っていたのとまるで違いました。何年も放っておかれた土は、上のほうに草の根がからみ合い、その下は粘土のように固くしまっています。鍬を打ちこむと、手首にずんと返ってきます。石も多くて、ときどき鍬の先がかちんと鳴りました。その音がするたびに、わたしはつい手を止めて、刃が欠けていないか確かめてしまいました。

一年目は、土を作るだけで終わったようなものです。掘り出した石は、ふるいにかけて分け、畑のすみに積みました。落ち葉を集めて積み、近くの農家から牛ふんの堆肥を分けてもらって、すき込みました。文子は「石の山のほうが、野菜より育っていますね」と笑っていました。

わたしは工場の癖が抜けず、畝の幅を巻き尺で測り、両端に杭を打って糸を張り、まっすぐに立てました。文子はそれを見て、「旋盤じゃないんですから」と言いました。それでも、まっすぐな畝は見ていて気持ちがよいので、わたしはやめませんでした。

その春に撮った写真が一枚、残っています。まだ何も育っていない畑の前に、首に手ぬぐいを巻いたわたしと文子が並んで立っています。二人とも、少し照れたような顔をしています。

土を手で確かめる

一年目の夏は、うまくいかないことばかりでした。トマトは、色づく前に実が割れました。大根は、土の中の石に当たったのか、二股や三股になって出てきました。きゅうりは、夏の途中で葉が白っぽくなり、実をつけなくなりました。

工場なら、寸法が狂えば、原因を一つずつ調べていきます。畑でも、同じようにやろうとしました。けれど、畑の相手には図面がありません。雨の多い年と少ない年で、同じことをしても結果が違います。わたしは、それがはじめのうち、どうにも落ち着きませんでした。正直に言えば、二年目の春には、やめようかと思ったこともあります。

続けられたのは、近所で長く畑をしている人が、土の見方を教えてくれたからです。種をまく前に、土をひとにぎりつかんで、ぎゅっと握る。手を開いたときにかたまりのまま残って、指で押すとほろっとくずれる。それが、ちょうどよい湿り気だそうです。べたっと手につくときは、まだ早い。さらさらとこぼれるときは、水が足りない。

握って、開いて、確かめる。旋盤の前で、削った部品を指の腹でなでて、手のひらにのせて重さを見ていたのと、どこか似ていると思いました。測る道具は違っても、最後に頼りになるのは自分の手です。そう思ってから、畑が少しおもしろくなりました。

二年目、三年目と、土は少しずつやわらかくなりました。鍬がすつと入るようになり、掘り返すと、みみずが出てくるようになりました。文子はみみずを見つけるたびに、「いた、いた」と喜んでいました。

二年目の夏に掘ったじゃがいもは、一年目とは比べものにならないほど、大きくそろっていました。株を一つ引き抜くと、土の中からごろごろと出てきます。文子はかごをいっぱいにして、半分を近所に配りに行きました。わたしは、配りに行く文子の後ろ姿を見ながら、土を作るのに一年かけたのは無駄ではなかったと思いました。工場で、

新しい工程を作るのに時間がかかったときと、似たような気持ちでした。

何を植えるかを決めるのは、文子の係でした。どう植えるかを考えるのが、わたしの係です。文子を選ぶのは、白菜、ねぎ、大根、春菊と、冬に鍋にするものばかりでした。理由を聞くと、「みんなが集まったときに、鍋にできるでしょう」と言いました。夏はトマトときゅうりとなす、それにじゃがいもとさつまいもを作りました。

畑に出るのは、たいてい朝ごはんの前でした。文子が実をとり、わたしが草を抜きます。ひと仕事すむと、畑のすみの石の山に腰をおろして、文子が水筒に入れてきたお茶を二人で飲みました。何を話したのかは、ほとんど覚えていません。きゅうりが曲がったとか、なすが多すぎるとか、そんな話だったと思います。

種は、文子が茶封筒に分けて、表に野菜の名前と、まいた日を書いて、台所の引き出しにしまっていました。わたしが「去年のトマトはいつ植えたか」と聞くと、文子は引き出しを開けて、すぐに答えました。畑のことは、わたしより文子のほうが、よく覚えていました。

冬になると、白菜の外側の葉を寄せて、頭のところをわらひもでしばります。霜から中を守るためです。これも、近所の人に教わりました。文子は「霜に当たったほうが甘くなるんですよ」と言って、しばった白菜を、ひとつずつ手でたたいて回っていました。

冬の朝、霜柱の立った畑を歩くと、長靴の下でさくさくと音がしました。文子はその音が好きで、わざと畝のあいだを遠回りして歩いていました。

とれた大根を台所の流しで洗うと、泥の下から白い肌が出てきます。その晩は、その大根を煮たものを、二人で食べました。自分の手で掘ったものは、同じ大根でも、どこか重たく感じました。

孫と畑

孫は五人います。名前はこの本には書きませんが、いちばん上の孫は、わたしが畑を始める前の年に生まれました。いちばん下の孫が生まれたのは、平成二十二年です。

孫たちは家来ると、たいてい畑に出たがりました。小さいうちは、土をさわるだけで喜びます。じょうろで水をやらせると、野菜より自分の靴のほうがよくぬれていました。いちばん上の孫は、小学生になると、わたしの横で鍬を持ちたがりました。父の鍬は重すぎるので、柄の短い小さな鍬を一本買ってやりました。

夏休みには、畑でとったトマトを、その場で服でふいてかじらせました。日に当たったトマトは、なまぬるくて、皮がぴんと張っています。孫たちは、汁をあごまでたらして食べていました。店で買うトマトより、こっちのほうがいいと言われると、わたしは口では何も言いませんでしたが、内心は得意でした。

五人がそろって来ることは、めったにありませんでした。それでも、来れば一人ひとり、好きな仕事がありました。水やりの好きな孫、虫を探す孫、とれた野菜を数えて帳面につける孫。数えるのが好きな孫は、きゅうりが一日に何本とれたかを、わたしに毎回報告してくれました。わたしはそれを聞くと、なんだか工場の日報を受け取っているような気がしました。

いちばん上の孫は、中学生になると、あまり畑に出てこなくなりました。わたしは、それでいいと思っていました。ところが高校生になったある春、自分から「トマトを一畝やらせてほしい」と言ってきました。わたしは苗の植え方だけ見せて、あとは任せました。その年のトマトは、わたしの畝よりよくできました。

平成二十四年ごろの秋、孫二人と、さつまいもを掘りました。わたしは七十四でした。その日の写真には、つるを引っばる孫二人の後ろ姿と、しゃがんでいるわたしが写っています。

孫たちは、はじめ、スコップを土に突き立てようとしてしました。わたしは止めて、「スコップは芋を切る。まわりを手で掘ってみろ」と言いました。二人は顔を見合わせてから、しゃがんで、両手で土をかき分けはじめました。

しばらくすると、一人が「あった」と声を上げました。赤い皮が、土の中から少しだけのぞいています。そこで引っばろうとするので、わたしは「つるをたどってみろ。ほかにもついとる」と言いました。根をたどって掘っていくと、二つ、三つと、芋が続いて出てきます。孫たちは、自分で見つけたのがうれしいのか、泥だらけの手で芋を持って、文子のところへ見せに走っていきました。

わたしは、どこを掘れば芋があるか、知っていました。けれど、それは言いませんでした。自分の手で土をさぐって見つけたほうが、ずっと覚えているものだったからです。

平成二十七年に文子が亡くなってからは、畑は一人で続けました。一人だと、畝を一本立てるのにも、前の倍ほど時間がかかります。種の茶封筒も、どこに何があるのか、しばらくはわかりませんでした。

それでも、朝になって畑に出れば、草は伸びていて、することがありました。白菜とねぎと大根と春菊は、文子が決めていたとおりに、いまも毎年植えています。

一人では、とれた野菜を食べきれません。美和や誠や由紀が来たときに、新聞紙に包んで持たせるようになりました。誠には、持って帰る量がいつも多いと言われます。

作業小屋の旋盤

令和二年ごろ、家の作業小屋に、小さな卓上旋盤を一台置きました。八十二のときです。

きっかけは、父の鋤でした。柄の付け根の金具がゆるんで、がたつくようになったのです。金物屋に頼むこともできました。けれど、わたしは自分で削りたいと思いました。誠に話すと、「父さん、置いたらいいよ」と言って、小屋の台に据え付けるのを手伝ってくれました。

工場の旋盤とは比べものにならない小ささで、作業台の上ののってしまいます。それでも、主軸があり、刃物台があり、ハンドルを回せば刃物が進みます。鉄の丸棒をくわえさせて、スイッチを入れました。刃物を当てると、きゅるきゅると鉄の削れる音がして、細い切りくずが、くるくると巻きながら落ちていきます。

その音を聞いたとき、二十年あまり離れていた耳が、ずっと昔に戻ったようでした。工場では、毎日この音の中にいました。音が少し高くなれば刃物が当たりすぎている。にぎれば刃物が傷んでいる。そう

やって、目より先に耳で確かめていたのです。小さな旋盤でも、鉄は同じように鳴りました。

金具は、三度目でようやく、柄にきちんとおさまりました。一度目は削りすぎて、ゆるかった。二度目は、わずかにきつかった。若いころに岩田さんについて習った、削っては捨てる一年目を思い出して、一人で小屋の中で笑いました。

父は、鉄を打って鋏を作りました。わたしは、鉄を削ってその鋏を直しています。同じ鉄の仕事でも、音はまるで違います。けれど、手を動かして確かめるところは、たぶん変わらないのだと思います。

小屋の窓からは、畑が見えます。朝は畑に出て、雨の日や手のあいた午後は小屋にこもる。勤めていたころは、鉄と土は別のものだと思っていました。けれど、畑の道具を小屋で直し、直した道具でまた畑を耕していると、どちらも同じ一つの仕事のように思えてきます。

それからは、ときどき小屋で小さなものを削っています。畑の支柱をつなぐ金具や、ゆるんだ道具の部品です。孫が小屋をのぞきに来ると、わたしは手を止めずに、「音を聞いてみろ」と言います。孫は、わかったような、わからないような顔をしています。

いちばん上の孫は、一度、自分でハンドルを回してみたいと言いました。わたしは横について、刃物の当て方と、ハンドルを回す速さだけを教えました。はじめは力が入りすぎて、音がきいきいと高くなります。「いまの音はだめだ。もう少しゆっくり」と言うと、孫は手をゆるめました。すると音が落ち着いて、切りくずがきれいに巻いて出てきました。孫は「ほんとうだ、音が変わった」と言いました。わたし

が工場で何十年もかけて覚えたことを、孫は十分ほどで一つ覚えしました。うれしいような、少しくやしいような気持ちでした。

鍋と米寿の食卓

令和七年の冬、孫たちが集まって、畑の野菜で鍋をしました。わたしは八十七になっていました。

その日の朝、孫たちと畑に出て、白菜とねぎと大根と春菊をとりました。文子を選んでいて、冬の鍋の野菜です。孫たちは、もうみんな大きくなっていて、台所で野菜を洗い、包丁で切り、鍋の支度まで自分たちでしてくれました。わたしは食卓に座って、それを見ていました。手を出そうとすると、「じいちゃん座っていて」と言われました。大根の切り方が少し厚いと思いましたが、それも黙って見ていました。

鍋が煮えると、湯気の向こうで、孫たちがよくしゃべります。仕事の話、学校の話、友だちの話。わたしは、ほとんど口をはさまずに、それを聞いていました。白菜は甘く煮えていて、大根には、だしがしみていました。

その日に撮った写真があります。湯気の立つ鍋をまん中に、わたしと孫たちが食卓を囲んでいます。わたしの前の取り皿には、孫たちが勝手によそってくれた白菜が、山のように盛られています。食べきれないと言ったのですが、「じいちゃんが作った白菜だから」と言われて、結局ぜんぶ食べました。

食べ終わるころ、孫たちが口々に言いました。

「じいちゃん、また畑の野菜で鍋をしよう」

わたしは「おう」とだけ答えました。文子が、なぜ冬の鍋の野菜ばかり植えたがったのか、その晩になって、ようやくわかった気がしました。

年が明けて、令和八年の一月、わたしは米寿の誕生日をむかえました。美和と誠と由紀が来て、食卓を囲みました。美和に、わたしの話を本にしようと持ちかけられ、一度は断ってから引き受けることになったのも、その食卓でした。

そのあとで、三人がそれぞれ、わたしに言葉をくれました。

美和は、「お父さん、食卓でいつも黙って、わたしたちの話を最後まで聞いてくれてありがとう」と言いました。わたしは、話がうまくないから黙っていただけです。それを、そんなふうに受け取ってくれていたとは、知りませんでした。

誠は、「自転車の日の『音を聞け』は、いまでも仕事で使っています」と言いました。そこまで覚えていてくれたとは、思っていませんでした。

由紀は、「お母さんの湯のみ、ずっと台所に置いておいてね」と言いました。わたしは「置いておく」と答えました。文子の湯のみは、いまでも台所の棚にあります。

三人とも、いまでは自分の子を育てる側になりました。子どものころ、食卓でおかずを取り合っていた三人です。その三人が、わたしの知らないところで、わたしの言ったことや、黙っていたことを覚えていてくれました。親が子に何を残したかは、親にはわからないものだと思います。

美和と誠には、うまく返事ができませんでした。ただ、自分の湯のみを手を持ったまま、しばらく黙っていました。

手を動かして、確かめる

この本の終わりに、家族に残す言葉を一つ、と言われました。いろいろ考えましたが、わたしに言えることは、一つしかありません。

手を動かして、確かめる。

父の鍛冶場でふいごを押していたころから、わたしはそうやって覚えてきました。旋盤も、畑も、同じでした。頭でわかったつもりになっても、手で確かめるまでは、ほんとうにはわかっていません。返品を受けた年も、最後に頼りになったのは、自分の手で一つずつ確かめ直すことでした。

うまくいかないときは、たいてい、確かめるのを急いだときです。だから、迷ったら手を動かしてください。動かしてみて、違っていたら、またやり直せばいい。わたしは八十八になっても、まだやり直してばかりです。

孫たちにも、同じことを言っておきたいと思います。芋は、手で土をさぐれば見つかります。旋盤は、音を聞けば、うまくいっているかどうかわかります。誰かに答えを教えてもらうより、自分の手でさわって、耳で聞いて、確かめたことのほうが、ずっと長く残ります。わたしの父も、そういうことを口で言う人ではありませんでした。黙って鉄を打って、見せていました。わたしも、うまく言えたかどうかはわかりません。

いまも、ときどき作業小屋で、小さな旋盤を回しています。鉄の削れる音がすると、父の鍛冶場の槌の音や、工場のたくさんの旋盤の音が、いっしょに聞こえてくるような気がします。わたしの一生は、鉄の音といっしょにありました。

そして、その音のあとには、いつも食卓がありました。社宅の食卓にも、この家の食卓にも、文子がいて、子どもたちがいて、いまは孫たちがいます。わたしはそこで、黙って、みんな話を聞いてきました。

冬になったら、また畑の白菜とねぎと大根と春菊で、鍋をしようと思います。孫たちとの約束です。その日まで、わたしは畑に出て、手を動かして、確かめます。

奥付

題名: 鉄の音と、家族の食卓

語り: 高橋正一

贈り主: 美和・誠・由紀と家族一同

版: 見本 第1稿 (2026年10月3日)

制作: YNファクトリー / YN出版

この本は、自分史サービスの見本として作った架空サンプルです。登場する人物、地名、会社、出来事はすべて架空で、実在の人物・団体・場所とは関係ありません。